

神を中心とした家族愛の理想と LGBT 問題の克服の考察

石井 宏 2019.04.16

はじめに

[目次に戻る](#)

最近、LGBT という用語をよく聞くようになった。私は、はじめは少数者の話で関係ないものと思っていたが、パソコンである映画を見たとき、その主人公が同性愛者の疑いでホルモン注射などを打たれ、早死にしたというような内容があった。その閲覧者の感想を見て、同性愛に肯定的な意見が多いことに正直驚いた。もはや、これを他人事で済ませる時代ではないという気がした。私は家庭を愛の学校として大切にす世界平和統一家庭連合（以下、家庭連合）の会員として、創造目的学会で神様を中心とする家族愛を論じていく上でこれをどう考えるかは重要な問題であるという気がした。それで、家族愛と LGBT というテーマで論文をまとめようと思うにいたった。LGBT をいざ学ぼうと思うと多くの困難な課題があったが、私の稚拙な文書を読んでアドバイスして、励まして最後まで付き合ってくれた森田義彦氏に感謝する次第である。

LGBT の理解推進派は、LGBT 思想があることによって、それを本人が理解して自分自身のアイデンティティーが確立され、疑問が解決され生き方が見えてくると考えている。確かに、実際に自分のセクシュアリティを当てはめられるものがあったとと思っている方も多いようである。しかし、それにより逆に後悔した方や中には取り返しのつかないことをしてしまったと悩んでいる方もいる。例えば、レズにしてもゲイにしても後から異性を本当に愛したいと思うならば、それは単に切り替えればよいという問題でないことは誰でも感じることであろう。

人生においてうまくいかない内容があり、その原因の可能性を LGBT に見出すならば、その考え方こそ自分に必要なものと理解するのは当然であろう。しかし、もし、それが間違った思い込みとするならば、逆に本来の人生の放棄につながる可能性があるのではなからうか？また、もっと良い解決の視点や道はないのだろうか？そこに考察の一助を加えたいというのが、この論文の目的の一つである。

芸能界やマスコミでお姉キャラ等の活躍が目立つようになった。しかし、LGBT には必ずしも好きでなかったわけでもない苦しみもあるという者もいる。LGBT を否定しようと思ったが、そうでないと思うには、いろいろな場面で壁にぶつかり受け入れるしかなかったという人も見受けられる。その一方で政治的に多様な性を受け入れようという価値観が広められ、一般の人の影響も計り知れない状況になっており、現在、この是非を問うことにおいて、待ったなしの状況であると思われるのである。

それでは、はじめに、LGBT の一般的な解説を参考までに述べることにする。

LGBT とは、「Lesbian」（レズビアン、女性同性愛者）、「Gay」（ゲイ、男性同性愛者）、「Bisexual」（バイセクシュアル、両性愛者）、「Transgender」（トランスジェンダー、出生時に診断された性と自認する性の不一致)の頭文字をとり、セクシュアル・マイノリティー(性的少数者)の一部の人々を指した総称である。

LGB は、『性的な指向がどこに向くか』という問題である。「『そうだったのか LGBT』一般社団法人 LGBT 理解増進会」によれば、『好きになる性、魅力を感じる性傾向』と説明されている。

レズビアンは女性同性愛者であり、女性でありながら性的指向が女性に向かう人、ゲイというのは男性でありながら、性的指向が男性に向かう人、バイセクシュアルは両方に性的指向が向く人である。

トランスジェンダー (T) ※とは性の自認が体の性とは違う認識を持ち、戸籍の性はこうでも私は逆の性だと感じている方であり、性的違和感を持っている人がそうであるとされる。つまり、『心の性自覚』と身体の性が違うという違和感を持つ方である。※本論文のトランスジェンダーの取り扱いについては最終ページ参照

LGBT が流行のようになり、新しい考え方に安易に自分を当てはめてしまう人もいるようであるので、その誤解の例を順にあげてみる。

女性の場合、特に思春期はリーダーシップのある部活の先輩が好きになり「かっこいい、すてきと思う、一緒にいると楽しいな」と思い独占欲に似た感情が誘発されることもある。それでも、普通に親切にされたいという思いだけで性的な行為をしたいという思いを持つことがなければ、それはレズビアンの感情ではなく、思春期の多感な情の豊かさゆえの一時的な情の暴走である場合が多い。この情は、一般的には徐々に落ち着いてほとんどの場合は異性愛に向かうようになると言われる。ところが、これで自分はレズだと決めつけてレズの性的指向を肯定的に受け入れてしまうと本当にレズになるのである。

男性の場合、「同性の友達のほうが気楽で楽しい」「こいつかっこいい」と思ったとか「いいやつだ」と思うことは、同性が好きにことに相当するが、これは、性的な指向とは関係なくゲイではないのである。つまり、そこから、性的な関係をしたと思わなければ、ゲイではないのである。同性に魅力を感じたことが性的魅力を感じたと誤解して、本当にゲイに関心を持ち、ゲイの性的行為に刺激を見出すようになってしまうならば、本当にゲイになるのである。

LGBT の理解推進派の文章は、ある意味、はやく気づいたほうが心が整理されるという親切心で書かれているのであるが、本当の性的指向は思春期を越えて確立されることを思えば、その前にこの内容を知ってしまえば、性的自覚 (アイデンティティ) が確立される前に LGB を趣向として選択してしまう可能性があり、逆にその親切心は本人が望む幸福とは違う方向に導きかねない。

また、トランスジェンダーに対してもそうである。単に自分は男性だが「女性的なことのほうが得意なことがある。方向感覚は男性のほうが強いと言われるが方向音痴」だとか、女性だが、「男性的なものが好きだ。どうも、スカートは恥ずかしくて苦手でボーイッシュな服が好きだ」ということで、心が逆転しているわけではない。それは、幼少のころの体験や女性としての恥じらいから現れた現象である場合も考えられるが、トランスジェンダーのことを先に知ってしまうと体の性と逆転しているからだと思い込んでしまうきっかけとなる可能性がある。

「『そうだったのか LGBT』一般社団法人 LGBT 理解増進会」によれば、LGBT は、すべて先天的と言われている。しかし、実際には、先天的な科学的要因は確定された有力候補はなく、後天的原因と思われる内容は多数報告されている。また、ここで紹介した LGBT の定義自体にも、一般的な人にもある気質や興味であっても、そうではないかと誘ってしまうような側面があるのである。また、この論文で扱う成長過程の内容を見れば、そうでなくても、実は、様々な複合的要素で後天的に LGBT になる可能性は誰でもあることがわかるであろう。幼児期までさかのぼった原因から見ていくなれば、後天的でありながら、先天的に近い状況になり得ることがわかるであろう。そのような実例を通じて、考えてもらうのもこの論文の作成理由である。

LGBT は、実際の人たちの書かれたものを通じて、私の考察の結果でも自分だけではどうにもならないような状況にはなり得ると思われた。しかし、上記のように原因が後天的であるならば、克服方法もあるのではないかと考えた。それゆえ、キリスト教団体の克服法なども参考にし、家庭連合の教義である統一思想、統一原理を理論的軸として考察した。

最近、性の多様性というのが言われ、社会的に構築された男女のアイデンティティーをしてジェンダーと表現されるようになった。そして、今までの不完全な二元論的なジェンダー観は間違えだと言う立場の者もある。しかし、多様性とは言うが性は実際には二つだけであり、男性と女性に属する人々の個性に違いがあるだけと考えられる。また、この個性を生かせず性のアイデンティティーを変えてしまうような問題が生じているとしたらどうなるであろうか？この多様性のとらえ方は純潔のところでは別に論じ、この問題の原因については LGBT の原因と克服条件で後に論じたいと思う。

トランスジェンダーという方々を一見すると、本当に心が男女逆に入れ替わったような子供たちをテレビで見たことがあるであろう。それを見れば、誰もが受け入れてあげるのが、人権を保障するものとなると思われる。しかし、もし、逆のアイデンティティーを得る前に、個性を受け入れられながら、体と同じ性別で受け入れられるようなとらえ方があったのなら、心の整理ができていたのかもしれないと考えるのはまったく不適當なことであろうか。なぜかと言えば、性同一性障害者の思い込みによる性適合手術は問題になることがあるからである。

<https://www.sankei.com/west/news/180302/wst1803020062-n1.html>

(性同一性障害は「思い込みで後悔」…家裁、性別再変更の訴え認める)

後から結局、それが過ちで思い込みであったという話になれば、性適合手術をしたことで取り返しがつかなくなる場合がある。また、性適合手術をしても生殖機能はなく完全な異性になれるわけではない。本来あるものを取ったり、無いものをつけたりするわけであるから激しい苦痛もともない、体には当然強い負担がかかる。また、一生涯ホルモン注射でさらに体に負担がかかり、男性ホルモンは肝機能障害と動脈硬化、女性ホルモンは乳がんの危険性を高める。それだけのリスクをもってしても外性器の形が似るだけ、つまり、実体は去勢術と疑似性器形成術であり、性適合とは名ばかりである。もともと、異性に見た目が近い方ならいいが、そうでない場合は、形だけでもそれらしくするには全身整形手術しかなく、かなりのお金も必要である。性適合手術さえすれば完全に異性になれるという思い込みは持つべきではない。また、手術後も多くの方は精神的な不満はなくなるという調査結果がある。

ゲイ・レズビアンスタディーズのクィア理論の基礎を築いたセジウィックは、「性的欲望は、安定したアイデンティティを溶解させる、予想しがたい強力な溶剤」であり、「同性愛と異性愛は揺れ動くもの」だと言った。しかし、「性的な欲望」を満たしたいことが中心であるならばそれは利己的なものであり、愛とはいいがたい。また、この内容自体の当然の帰結としても同性愛は必ずしも始めからではないという主張であると言わざるを得ない。後に解説するが、セジウィックは、これを利用して女性解放論者とレズ・ゲイを解放しようとしたのであるが、そのような手段で人が幸福になれるはずはない。

国際的には、現在は、同性愛は病気ではないという見解である。NPO 法人 EMA 日本のホームページによれば「現在では WHO (世界保健機関) や米国精神医学会、日本精神神経学会などが同性愛を「異常」「倒錯」「精神疾患」とはみなさず、治療の対象から除外しています。文部省も 1994 年に指導書の「性非行」の項目から同性愛を除外しました。」とある。こうなった経緯には同性愛の方々が団体を作り、運動をしたためであると言われている。しかし、除外しましたとあるのは、病気であると考え続けられてきたということである。病気でないとしたほうが、同性愛者にとって幸福だと同性愛者の運動によって理解すべきだということになったのである。しかし、これは、本当は同性愛者だけの話ではなく、誰もが関係があつて生活している以上、彼らの訴えている内容が誰にとっても未来の子供にとっても幸福であるかということが問題となる。その代表的な思想が LGBT を中心とする性の多様性という考え方なのであり、これが、それ以外の一般の方々を含め、どういう方向に導くものが問題となるのである。

愛と性の問題は非常に重要な問題であり、性は愛と命と血統も未来へとつなぐ重要なものである。もちろん、トランスジェンダーの子供などの話を聞けば同情に値する内容があり、彼らも幸せになってほしいと思い、こんなことが本当にあるのかと誰もが同情せざるを得ない。人は誰しもがこの世に生まれ出た以上何らかの意味があると思われる。しかし、調べてみると多くの問題が絡み合いながら組み合わさっており、整理する必要性を感じた。性的な悩みを LGBT のカテゴリーに当てはめることは時に本質から目をそらして人生を狂わしてしまうことになりかねない。そこで、この問題を本質的に何らかの解決する本当の方向性とは何かを家族愛の理想とともに考察を進めようと思う。論じるにあたって、LGBT は性的アイデンティティ全般に当てはまる対象である場合、LGB や LG は特に性的指向に対する問題で関わる場合と分けて表現することがあるが、了承していただきたい。

目次

はじめに	P. 1
第1章 愛と性と結婚について	P. 8
第1節 「結婚」と「婚姻」の日本語の表現	
第2節 結婚とは家族制度	
第3節 同性婚の子育ての問題点	
第4節 同性愛の浮気による問題と危険性	
第2章 人生の目標であり神の祝福である創造目的と三大祝福	P. 11
第1節 第一祝福「生めよ」・個性完成 人格者として成長せよ	
第2節 第二祝福「増えよ・地に満ちよ」・家庭完成 愛と人間関係の学校	
第3節 第三祝福「万物を治めよ」・万物主管 社会貢献による福地世界	
第3章 純潔と LGBT	P. 15
第1節 LGB を利用した性革命（フェミニズムを超えて 統一思想研究院 大谷明史参考）	
(1) バトラーのレズ運動によるジェンダートラブル革命	
(2) セジウィックによる性的欲望を中心としたレズ・ゲイ連帯運動と異性愛制度の破壊革命	
(3) 性の多様性に利用されているトランスジェンダー	
第2節 性の多様性ではなく本来は二つの性と個別相	
(1) 生殖器によって分かれる男女と個別相	
(2) 個別相に由来した多様性と性自認、性指向を変える後天的可能性	
第3節 性欲中心の関係の問題	
第4節 健全な性関係とは？	
第5節 不健全な性関係とは？	
第6節 純潔から見た性革命の問題点	
第7節 純潔の責任	
(1) 性的関係の影響は多方面に及ぶ	
(2) 禁欲	
(3) 配偶者に対する責任	
(4) 子供に対する責任	
第4章 LGBT の科学的原因の考察	P. 24
第1節 LGBT に先天的生物学的な有力説はない	
第2節 脳の構造による後天的問題の可能性	
(1) 大脳辺縁系の情的記憶の影響による LGBT への可能性	
(2) 幼児期のストレス反応による LGBT への可能性	
(3) 性同一性障害の後天性の可能性	
第5章 成長期間における LGBT の原因と克服条件	P. 26
第1節 親の愛情と幼児期(胎児～6歳)における問題	
(1) 親が支配的、無関心、何らかの中毒症、	
(2) 親の夫婦関係の問題や片親の不在	

- (3)親の教育方法・教育指針
- (4)親に性的なアイデンティティーを否定的に見られる
- (5)母親が妊娠中に受けたストレスなど
- (6)性的虐待の経験
- (7)保育園や幼稚園での疑似異性的な体験
- (8)興味本位の自慰行為

第2節 学童期(6歳～12歳)の問題：兄弟姉妹の心情、友情関係が芽生え、学校教育で規則を学び始める時期

- (1)学校教育でLGBを肯定する内容を教えられる
- (2)異性に否定されたり暴力を振るわれたりする。
- (3)同性間の性的いたづらや異性からの性的虐待を受ける。
- (4)その他の性的虐待
- (5)親や周りの大人たちから逆の性だったら良かったのにとこのようなことを言われる
- (6)友達からのプレッシャー

第3節 思春期(12歳～18歳)の問題：性的な成長と共に、その中で自己の人格を確立する時期

- (1)性的違和感の解釈を性同一性障害、という情報を得る
- (2)部活動等の中でのプレッシャーや違和感
- (3)同性間、異性間の性的トラブル
- (4)LGBの同性からの誘い
- (5)LGBTの情報や写真を友達や雑誌等から入手する
- (6)同性にひかれる情や性的欲求が出る

第4節 青年期(18歳から24歳)の問題：専門的学習や就職して働き始め社会での自分の役割を意識し、結婚を考え始める時期

- (1)男性や女性の理想像価値観の違いにより異性と接するのに疲れてしまう
- (2)社会的なジェンダーの役割の仕事に合わない
- (3)自分が本当にLGBか確かめるために行動し、確信する
- (4)強姦・性的虐待

第5節 環境問題

成長期のLGBTの原因一覧表

第6章 四大心情圏の喪失とLGBTに対する影響-----P.44

- 第1節 人間の墮落と四大心情圏の喪失
- 第2節 四大心情圏の完成と墮落による喪失
- 第3節 子女の心情圏とLGBT
- 第4節 兄弟姉妹の心情圏とLGBT
- 第5節 夫婦の心情圏とLGBT
- 第6節 父母の心情圏とLGBT

第7章 墮落性本性から見たLGBTの原因-----P.47

- (1)神の立場に立てない。(神のように正しく無条件に愛せない)
- (2)自分の位置を離れる

(3) 主管性の転倒（主客転倒）

(4) 罪の繁殖（責任転嫁）

第8章 LGBTの克服の順序と信仰-----P. 51

第1節 カウンセリングとの違い

第2節 克服順序

終わりに-----P. 53

参考文献-----P. 56

付録、LGBTの原理的な問題を理解するみ言葉と神の存在証明----- P. 58

統一原理から見た LGBT の問題点

統一原理と統一思想における神の存在証明

第1章 愛と性と結婚について

[目次に戻る](#)

人間において、愛し、愛されているという実感は生きていくうえで非常に重要な問題である。

統一思想*では愛は生命と幸福の源泉と解説されており、また、愛の過ちは逆に最大の不幸の原因ともなると見るのである。ところで、最近、LGBT 関連では同性婚の問題が話題に上っている。愛し合っているならば、同性でも結婚として認めても良いのではという意見である。では、結婚とはどのような意味であろうか？ウィキペディアを引用する。

※ 統一思想とは広義には世界平和統一家庭連合の創始者である文鮮明先生が説いた神主義の思想であり、狭義には初代統一思想研究院院長の李相軒氏（1914-1997）が哲学的に体系化した統一思想要綱という本の内容を意味する。

結婚（けっこん、英: marriage）とは、夫婦になること。類似概念に婚姻（こんいん）があり、社会的に承認された夫と妻の結合をいう。後述のように学術的には「結婚」はもっぱら配偶関係の締結を指し、「婚姻」は配偶関係の締結のほか配偶関係の状態をも含めて指している。

第1節 「結婚」と「婚姻」の日本語の表現

ウィキペディアを再び引用する。

先述のように学術的には「結婚」は配偶関係の締結を指し、「婚姻」は配偶関係の締結のほか配偶関係の状態をも含めた概念として用いられている。平凡社世界大百科事典やブリタニカ国際大百科事典などの百科事典では「婚姻」を項目として立てている。

一方、日常用語としては「結婚」という表現が用いられる頻度が増えている。広辞苑では「婚姻」の定義として、「結婚すること」とした上で、「夫婦間の継続的な性的結合を基礎とした社会的経済的結合で、その間に生まれた子が嫡出子として認められる関係」としている。

概ね以上の内容が結婚であり、「男女間で、継続的な性的関係が社会的に認められ、その子を嫡出子として認められる関係」というのが一般的な結婚の定義である。

また、日本国憲法 24 条においては「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し」と規定している。条文を素直に読めば、両性すなわち、「男性と女性、その両性の合意」のみに基づいて婚姻が成立している以上、同性婚を認めていないのである。

第2節 結婚とは家族制度

第1節の内容から、同性婚を考えてみよう。まず、同性では本来の意味での性的結合はできない。そして、子供も産むことができないことは生物学的において事実である。二人の愛の結合を愛情だけでなく肉体でもなし、心と体を本当の意味で共鳴させ一つになることはできない。両者の血統が混ざり合った子供を作り家庭を築くことはできない。ただし、子供ができない夫婦は確かに存在する。愛があれば同じではないかと言うであろう。しかし、男女の夫婦は何らかの身体的問題で子供が産めないことがあるが、同性でははじめから生むことができない。そして、性を刺激し合うことはできても性的結合はできない。その性の在り方は子供とははじめから関係がないのである。そして、そのような愛情関係の継続は性と愛と生

命の関係を断ち切ってしまうことが大きな問題になるのである。

結婚は、子どもを含めた法的な家族制度であり、子どもや社会の利益の為に、カップルによる性行為、出産、子育てが責任をもってなされるように社会が承認する制度として存在する。そして、生まれてくる子どもの福祉、実の親との安定した親子関係を保護することを第一の目的としているのである。婚姻は男女に特有の結合体であり、安全な性的関係・責任ある出産・最善の子育て・健全な人間関係の発達・妻や母という役割の保護をしつつ、長期的な家族としての関係を保っていく為のものである。それゆえ、結婚では基本的には一夫一婦制や貞操義務が夫婦としての当然の前提となり、さらにそのことが、生まれてくる子ども達の健全な発育を助け、社会の秩序を確保する最適な手段ともなってきたのである。

(「同性婚は子供のためになるか 民法論議に欠けていること」 池谷和子 参考)

第3節 同性婚の子育ての問題点

第1節、第2節の内容を踏まえて同性結婚の子育てを検討しよう。双方のカップルが養子をもろうとしよう。男女の夫婦の愛はその子にも父母の愛として受け取られ、将来の結婚のためのモデルとしてその愛情関係が受け継がれるであろう。しかし、同性愛のカップルの養子は、父母の愛を受けるのではなく父二人、母二人という偏った愛を受けざるを得ない。また、その愛を見習いたいと思うならば、同性愛にならざるを得ず、異性愛での結婚をしたならば自身が偏った愛しか受けられなかったことに寂しさを感じるであろう。同性結婚には「子どもを含めた世代を超えた継続性」のビジョンがなく、性を二人の親密さのみに限定し、愛と性と生命を断ち切る行為は親子の普遍的関係を変えてしまう行為であり、それが、精神的存在である人間の性の倫理において問題があると言える根拠である。

同性婚を行っている国ではすでに子育てにおいて多数の問題が起こっているのである。例を世界日報社の『揺らぐ結婚』からあげる。

レズの同性婚のカップルに育てられたパーウィックさんは、「父親の不在は私の中に大きな穴をつかった。毎日、お父さんに会いたくてたまらなかった。私は母のパートナーを愛していたが、もう1人の母親は失った父親の代わりにはなり得なかった」連邦最高裁判所が同性婚全米合法化の判決を下す数カ月前、「親愛なるゲイコミュニティへ、あなたがたの子供たちは傷ついている」と題する公開書簡を保守系ニュースサイトに掲載し、同性婚反対を訴えた。

彼女は、男など必要ないと主張する女性たちに囲まれて育ったなかでは「同性婚の合法化」をともに訴えていたが、男性と結婚して4人の子供を授かると、子供たちが父親を愛し、また、父親から愛される姿を見て、「伝統的な結婚と子育ての美しさ」と幼いころに感じた父のいない寂しさを打ち消してきたことがわかったのだ。

(『揺らぐ結婚』 同性婚の衝撃と日本の未来 世界日报社 P.132~133)

さらに、世界日報社の『揺らぐ結婚』には、次いでもっとひどい例を挙げている。一夫一婦の結婚でもときに浮気は問題になるが、同性婚ともなるとともに性的な完全な結合はなされないため、性は遊びの道具のようにされてしまう。同性愛者の父を持つステファノウィッツさんは、その様子をこう語る。

さまざまな男が家にやって来ては、父親と廊下やトイレ、さらには子供の部屋まで、至る所で性交渉した。複数の男が乱交することもあった。ステファノウィッツさんは時々、精液や糞便にまみれたシー

ツの洗濯をさせられた。ステファノウイツさんは父親から胸を撫で回されたほか、双子の弟は父親のパートナーから性的虐待を受けた。それでも、父親は男を家に連れ込み続けた。

（『揺らぐ結婚』同性婚の衝撃と日本の未来 世界日報社 P.134）

とこのように乱れた関係の中で親の愛を受けたとはいい難い状況だったのである。

第4節 同性愛の浮気による問題と危険性

第3節のステファノウイツさんのようなひどい例は確かに一般的ではないかもしれない。一般的なレズやゲイはもっと良識をわきまえているだろう。しかし、生命と性が切り離された関係は性が刺激のための道具へと変わりやすいためより注意が必要となる。同性愛者のブログ等でも、同性愛は、友達に見えるので不可視性があり、浮気が多く、そのようなこと（浮気）を気にしないようにしていると書かれていた。

異性愛の純愛を求めようとするクリスチャンの同性愛者でもすぐ油断すると性的な同性関係の誘惑があるというブログ内容があった。性に対する価値観そのものが軽くなってしまいがちであることも確かで、それが性病等の発症率が高い理由であると思われる。ここで、愛が幸福の源泉って言いながらそれを否定するのか？生きがいを奪うの？と思われるかもしれない。しかし、異性愛であっても一時的な好きという感情だけで、盲目的に性的関係に至ることは危険な行為である。

「全ての若者が、不用意な性交渉による身体的・精神的な問題を避けるために、性行為を控えるべきなのです。同性愛者の性交渉は、そうでない人と比べて、一層危険です。同性愛者である男性は、エイズ、肝炎、淋病、肛門癌、胃腸内感染などにかかりやすいことが知られています。また同性愛者である女性（多くの方が男性とも性的関係を持っている）は、腔寄生虫症やB型・C型肝炎、エイズなどにかかりやすいことが知られています。」

（「人格教育」のすべて—家庭・学校・地域社会ですすめる心の教育 麗澤大学出版会 P.157）

自分のみならず愛する相手が、このような危険にさらされる行為としたら？また、人格的、能力的に成長が必要な時はそのような感情は正しいだろうか？本当に相手の幸せになるか？また、好きと言う感情は相手と趣味が合ったり、相手が親切であったり、自分の理想に近ければ同性でもあいつみたいなのは好きだ、あの子とは気が合うというのと、それを性的な感情に向けるかは別の問題であり、好きならば、盲目的に性的な関係を結ぶという風潮が不分別なフリーセックスにつながってきたのである。

結婚に対して、統一思想的観点を以下にあげる。統一思想要綱の芸術論と本性論から引用し、第の番号は続き番号とした。

第一に、人間は神の形に似て創造され男と女に創造された。それゆえ、男女は一体となって全一者となり、神の似姿になるのである。人間は誰でも、心の潜在意識の中に自己に不足している部分が満たされることを願う映像をもっているので、現実的にその映像どおりの対象に対するとき、不足した部分が実際に満たされ（相補性）、喜びを感じるようになるのである。

（新版 統一思想要綱 第7章 芸術論 相補性 P.420）

第二に、夫婦が神を中心として横的に愛し合うとき、神の縦的な愛がそこに臨在するようになり、ここに愛の相乗作用による生命の創造がなされるようになるのである。

第三に、夫婦の結合は神の創造過程の最後の段階であるため、それはまさに宇宙創造の完了を意味するのである。

第四に、夫婦はそれぞれ人類の半分を代表する存在である。したがって夫婦の結合は、人類の統一を意味するのである。すなわち夫婦においては、夫は全人類の男性を代表しており、妻は全人類の女性を代表しているのである。現在、世界の総人口は約六十億人といわれている。したがって、それぞれ三十億人を代表する価値をもっているのが夫であり、妻である。

以上のような立場から見ると、夫が妻を愛し、妻が夫を愛するということは、その家庭における神の顕現と宇宙創造の完了を意味し、人類の統一と家庭の完成を意味する。このように夫婦の結合は、実に神聖にして尊い結合なのである。

(新版 統一思想要綱 第3章 本性論 P. 230~231)

このような内容の実現につながる内容を随時論じていきたい。

第2章 人生の目標であり神の祝福である創造目的と三大祝福

[目次に戻る](#)

家庭連合の教えである統一原理[※]には、神様の創造目的は、真の愛を通じて喜びを得ることであり、そのために人間を創造したとし、聖書の創世記の内容を紹介し、神様は三大祝福を与えたと解説している。

※ 統一原理とは、文鮮明先生が、「人が正しく生き、理想家庭と世界平和を実現して幸福になるための道」として解き明かした世界平和統一家庭連合の教義であり、主に創造原理、墮落論、復帰原理で構成されており、原理講論という本にまとめられている。

この内容を「世界平和女性連合」の大会で韓鶴子家庭連合総裁（文鮮明先生の婦人）が宣布したみ言葉から引用する。この内容は、講演文を吟味された文鮮明先生のみ言葉でもある。

三大祝福を下された神様

聖書の創世記の記録によれば、神様が天地を創造されたのち、最後に人間始祖である男性のアダムと女性のエバを創造され、彼らに三大祝福を下されると同時に、責任分担も下さいました。三大祝福とは、すなわち「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」というものでした。・・・・・・・・・・・・・・・・

これは、神様が人間とこの宇宙を創造された目的が何であるかを教えてくれる内容であると同時に、人生の根本を明らかにした内容でもあるのです。「生めよ」という祝福は、すべての人間は、地上に生まれ、完成した人格者として成長しなければならないことを意味します。完成した人格を備えた男性と女性が夫婦の関係を結び、子女を生んで育てる父母の道を行くようにしたことが、人生の二つ目の祝福です。そして、家庭を率いていく夫と妻、すなわち父親と母親がその道理を果たしながら、この世界をより便利で豊かな福地世界として建設し、地上天国を立てることが神様の創造目的なのです。

(韓鶴子総裁御言葉選集2 理想家庭の主役となる女性Ⅱ P. 63)

上記のみ言葉の内容は、人格的な人生の目標とも一致している。

人間にとって幸せとは何なのでしょう。この問題に対する比較文化の研究の結果を、トニー・デ
イバインらの著書、『「人格教育のすすめ」アメリカ・教育改革の新しい潮流』の中で、世界中の様々な
文化を検討した結果、真の幸福には以下の三つの要素があると述べられています。

- ・ 人格を向上すること— できるだけ良い人になる。
- ・ 愛のある人間関係を築くこと— 夫婦や家族関係、その他の人間関係が充実している。
- ・ 社会に貢献すること— 他者の人生をより良くする。

徳を備えた人生を送るために必須なこれらの三つの要素を追い求めるのであれば、私たちは心の底
から欲しているものを叶えようとしていることとなります。私たちがこの三つの要素を無視したり、
それらに反するようであるならば、人格を高めず、人間関係に愛がなく、他者から恩恵を受ける一方
で貢献しないのであれば、私たちは人生を不幸にしていることとなります。

（「人格教育」のすべて—家庭・学校・地域社会ですすめる心の教育 麗澤大学出版会 P.285）

では、神の三大祝福の内容を統一原理、文鮮明先生のみ言葉を主軸として、『「人格教育のすすめ」アメ
リカ・教育改革の新しい潮流』の人生の三つの目標の内容を参考にしつつ、解説する。

第1節 第一祝福「生めよ」 個性完成・・人格者として成長せよ。

יָרַבְיָ

ヘブライ語発音：ペルー 原意：実を結べ

争いのない幸福の出発点は、個人の人格の成熟が必要であり、心と体の調和こそがその出発点である。
誰でも、人は良心を持ち、できるならその良心の負債のない生活を送りたいと願っている。良心はカント
がいうように絶対者の意思を無意識のうちに感じ取っている。誰かが
危機に陥っているときは「助けなければ」という心の命令が下り、悪い
ことをすれば「良心の呵責」を感じるであろう。

ただし、良心は、愛を通じて喜びを感じたいとする人間の本質的な
心情と無関係ではない。良心は、どのように心情が愛を受けて育っ
てきたか、どのような愛を実現したいかというのと密接な関係を持っ
ている。すなわち、心情の方向性が他者の為に生きようとしているか、
自己中心的に満たしたいと思っているかという内容との緊張状態
の中にあるのである。



したがって、良心が適切に機能するかどうかは、真の愛をいかに知って利己的愛を克服して道徳的目標
に向かうことができるかどうかにかかっているのである。すなわち、神の愛をいかに体恤するかが問題で
ある。(体恤：自らのものとして深く体験し、感じるようになること)聖書によれば、本来、人間の体は神
の宮となるはずだったのである。(コリント第一の手紙 3:16) それはまさに、人格の実を結び、神から
与えられた個性を実現する姿なのである。その上で次の第二祝福として、神様は、男と女が結婚し、父母

になることによって、その子女を愛するように創造されている。

第一祝福を全うするにはこうした父母を通じて神様の愛を知ることは大事な要素であり、その中で心情と良心が育まれるのである。LGBの親を持った場合、この愛のバランスに問題が生じるし、また、親の愛の問題は、心情と良心の育成に問題を来たすのである。このことについては後に論じる。こうした心情と良心を育成することが、人格形成の中心的課題であり、その上で社会的規範や知識、技能、体力など必要な社会的能力を成長、成熟させることが、神の第一祝福であり、人生の第一の目標である。

第2節 第二祝福「増えよ・地に満ちよ」 家庭完成・愛と人間関係の学校

וּמִלְוֵי וְרֵבּוֹ (ヘブライ語発音：ウレーバー ウミルウー)

愛は幸福の源泉であり、家庭は愛の学校と言われる。この内容を文鮮明先生のみ言葉から引用する。

神様の息子、娘として造られたアダムとエバは、まず神様から父母の愛を受けながら、子女の心情を感じて成長していきます。また、互いに兄弟姉妹の心情を感じながら成長します。その次に、神様の祝福のもとに真の夫婦となり、互いに愛し合いながら、夫婦の心情を感じるようになっていくのです。そして子女を持ち、真の父母となれば、子女を愛しながら父母の心情を感じ、さらには神様が自分たちを子女として愛される、その父母の心情を経験するようになっていきます。

このような子女の心情、兄弟姉妹の心情、夫婦の心情、父母の心情を四大心情と言います。人間が完成するためには、神様の真の愛のもとで四大心情を完全に体恤しなければなりません。この基台が、理想的な家庭です。人間に対する神様の創造理想が実現する最小単位が、四大心情圏を完成した家庭です。(1994.5.2)

※体恤：自らのものとして深く体験し、感じるようになること。(「真の愛を育む道」文鮮明 P.22)

このように、家庭のなかで愛や人格を学び成熟させることによって、将来、社会における人間関係、例えば会社における上司や同僚、部下とも良い人間関係を結べる。このように、家庭という共同生活で気配りや思いやりの価値を認識することが、社会的な共同生活の礎となるのである。

兄弟姉妹を愛し、そのような愛で同僚に対して接することができるならば、結婚生活においても持続する夫婦関係を築くことができる。夫婦愛は、親密さ、コミットメント(誓約)および共有という世界を通して心情を深め、固有の領域を形成する。永遠・唯一・絶対の人間の本心の要求を満たすのは、一夫一婦制のみである。結局、男も女も永遠に唯一自分だけを愛する相手を望むのである。そして、親の愛は、子を育成するために多くの犠牲を払うことによって、さらに心情を深めていく。



このように、親に対する子女の心情、兄弟姉妹の心情、夫婦の心情、親の心情という四大心情圏を体恤していくためには、愛の学校としての家庭を築くことが必要なのであるが、LGB行為の中では、このよ

うな家庭を築くことは非常に難しくなる。

第3節 第三祝福 「地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」 万物主管・・社会貢献による福地世界

וּכְבֹּשָׁה וְרָדוּ בְּדָגַת הַיָּם וּבְעוֹף
הַשָּׁמַיִם וּבְכָל-תַּיָּה הַרְמִשָּׁת עַל-הָאָרֶץ:

(ヘブライ語発音：ヴェヒヴシユーハ ウレドゥー ピドウガット ハヤム
ハシャマイム ウヴェホル ハヤー ハロメセット アル ハレアツ)



人間が万物を主管するためには、愛の学校である家庭で体恤した人間関係が欠かせない。また、人格を成熟させながら、個性を完成させていく中でさまざまな技術を身に着け社会貢献する中で、科学や芸術、スポーツなどを通じて万物を主管した社会環境、福地世界が築かれていくのである。それは社会的目的と家庭や個人の目的が調和しあう福地社会なのである。

この内容を文鮮明先生のみ言葉から引用する。

神様は人間に万物を主管しなさいと祝福されました。それでは、どうして人間を造っておいて万物を主管しなさいと祝福されたのでしょうか。つくられた神様が直接主管されず、私たち人間を立てて万物を主管しなさいと祝福された理由はどこにあるのでしょうか。それは、神様が天地万物を創造されるとき的心情を人間に教えるためだったのです。神様が万物をつくられた事情と心情を人間に体恤させるために、万物を主管しなさいと祝福されたというのです。(5-263、1959. 2. 15)

神様の愛を完成した人間が成し遂げる理想世界においては、全体目的と個体目的が自然に調和します。人間は、欲望もあり、愛の自律性ももっているのです。個人所有、個体目的が許されています。だからといって、無限定な個人所有、または全体目的を害する個体目的を追求することはありません。完成した人間は、自らの良心と本性によって自己の分限に合った所有量をもつようになるのです。

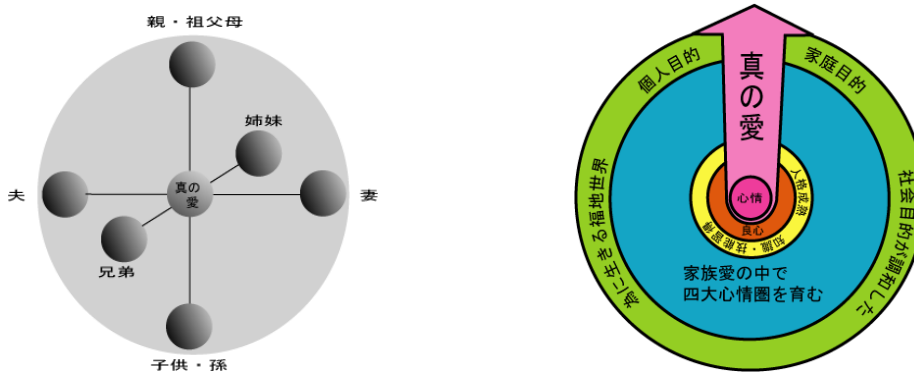
特に、真の愛を中心として、万物の真の主人の人格をもった理想的な人間の経済活動は、愛と感謝を底辺としているため、過大な欲望と不正はあり得ません。同時に、全体目的に反する地域や国家利益が強調されることもなく、また経済活動の目標が利潤の追求ではなく全体の福祉に焦点が集まるのです。

(27-176 1995. 8. 22) (「文鮮明先生のみ言葉に学ぶ統一原理 (前編)」 P. 91-92 P. 95-96)

LGBT の推奨者たちは、男女のジェンダーが差別を生み家父長制が経済格差を生むことからジェンダートラブルを巻き起こすことによって、経済も性的関係も平等に分け合う世界が来るという。しかし、性愛は平等に分け合うようなものでないことは第2節で論じた通りである。

さらに、その思想的代表者であるセジウィックが「性的欲望は、安定したアイデンティティを溶解させる、予想しがたい強力な溶剤」であると語ったように、彼らは「性的欲望」で伝統的な男女愛を崩壊させようとしたものであり、それは利己愛であり、人格の成熟とは無関係であり、そのような中で経済的に

分け合う世界が来るという何の根拠もないのである。しかも、性と愛の関係が崩壊することにより、人間の心情や良心も崩壊してしまい動物のような人間になってしまえば、決してこの第三の祝福は全うすることができない、つまり、本当の幸福を得ることはできないのである。



理想家庭と理想世界イメージ図 「人格教育のすすめ」 家族関係の三つの方向性の図
三つの人生目標による人格形成の図は修正して使用

第3章 純潔と LGBT

[目次に戻る](#)

第1節 LGBT を利用した性革命

LGB と言っても、同性に誰でも色目を使うというのは偏見である。性的指向が単に違うというだけであって、性的な行動ばかりを優先するものばかりではない。LGB の方々の多くは、ただ、自分の性的な指向に対する悩みを解決したいだけであって、同性愛者や伝統的な家庭まで壊そうという思いまでもってはいないであろう。しかし、LGB を広めようという思想的な土台になっている方々の考えの多くは、性解放運動の理論と関わり、性解放運動は、同性愛を社会的に抑圧されたものであるとみて、そのことによって、家父長制などの男女の格差が生じて、男性優位の社会が形成されていると見ており、伝統的な同性愛まで政治的に破壊しようという考えがある。

(1) バトラーのレズ運動によるジェンダートラブル革命

例えば、ゲイ・レズビアンスタディーズ、すなわち、同性愛者の権利を認めさせる教科書で知られるクィア理論（1990年代に登場）の代表的人物であり、基礎ともなっているバトラーの考えをまとめれば次のようなものである。

「不完全な哲学である二元論（例、陰陽二元論的な考え）の文化から生じた性の二分法の言説は不完全なものに過ぎず、ジェンダーはその不完全な二分法によって構築された言説によって行われるものにすぎない幻想である、そのジェンダーの言説によって行われるセックスのありかたは社会的に構築されたものに過ぎない。」このようにバトラーは考え、その思想的証明のためにレズビアニズムの戦略を実

践することにより、アイデンティティーのカテゴリーを完全に奪い取ることによって、ジェンダートラブルを巻き起こし、そのジェンダーの混乱によって異性愛制度を破壊し、そのことによって女性の権利を得ようとしたのである。

しかし、統一思想から見れば、不完全な人間とは言え、何もないところから、男女のジェンダー観が確立されたわけではなかった。それは、男女を創造したのは神[※]であるからである。そこに不平等があるのは、男と女の関係に、真の愛がないからである。次に論じるが、物静かで芸術的な男性がいても、闊達でスポーツ好きな女性がいても良いのである。そのような男女が、真の愛で調和すれば、美しい家庭がなされるのである。しかし、人は驕慢、猜疑、血気、偽りなどの思いで自己中心に相手を見てしまうので、問題が生じると思われる。

※ 男女の起源は神であるという、それは宗教の話であって科学的でないと思われるかもしれない。進化論では、強い生物を生むためには有性生殖が必要なのだという理由で生き残った理由をあげている。しかし、多くの子孫を残せる無性生殖の数の優位性に勝てる理由はない。そもそも、なぜ相互補完的な関係として雄雌が授受できるようになったのか、そのような機能がなぜ生じたのかという理由は進化論では何も語らない。これに対して、統一思想では神は愛のために宇宙を創造し、その愛の概念に従って、それを先有条件として男と女の相対的な関係を創造したとみる。最近、科学では性分化の成り立つ過程は奇跡的と言えるようなものであると見ている。そして、それを進化論的思想で解釈し、失敗による性の多様性は自然なのだという考えがある。しかし、科学では奇跡と思える過程が主流となっているのが事実である。文鮮明先生は「神様は天地創造において愛という干渉を持って男性と女性、オスとメスを作ったのです。」（「ファミリー」1992.4）と言われたが、進化論の説明よりもそれが一番納得のいく理由であり、このペアシステムが成り立った理由は絶対者である神の介在があって創造されたからという以外には説明がつかない。

(2) セジウィックによる性的欲望を中心としたレズ・ゲイ連帯運動と異性愛制度の破壊革命

また、クィア理論の原動力とも、王母（Queen Mother）とも言われるセジウィックは「性的欲望は、安定したアイデンティティーを溶解させる、予想しがたい強力な溶剤」であり、「同性愛と異性愛は揺れ動くものであって、セクシュアリティは混沌たるものである。」として、愛ではなく「性的欲望」を中心として「性的指向は揺れ動く」と語ったのである。そして、「男性が異性愛関係をもつのは男同士の究極的な絆を結ぶためである」と語った。

そのために、異性愛の男性の集団の中においては、異性愛者同士の男性同士の絆を切り裂きかねない女性解放論者やレズの女性と、男性たちの絆を切り離して「性的欲望」中心として、同性愛の集団にしかねないゲイの男性は排斥され、権利を奪われていると見たのである。つまり、異性愛男性の集団は、家父長制度の社会であり、ゲイやレズなどの同性愛者の嫌悪と女性解放論者の嫌悪に支えられているため、同性愛者と女性解放論者は、ともに家父長制度の社会の犠牲者になっていると見たのである。

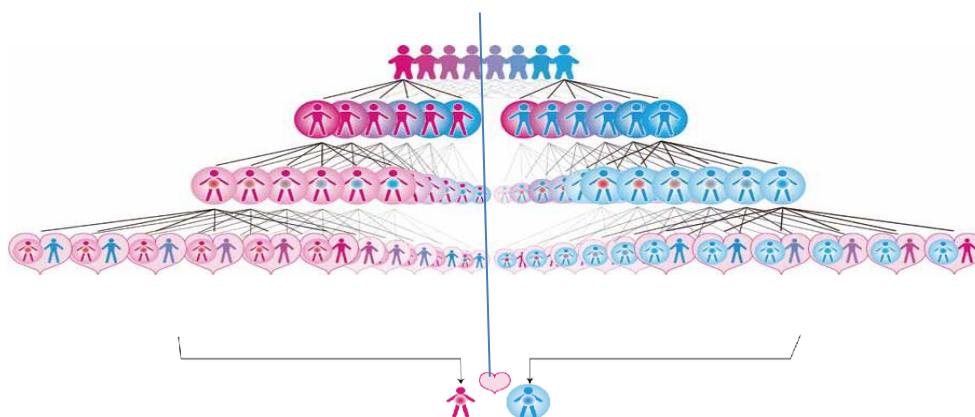
この家父長制度の社会から同性愛者と女性一般を解放するために、ゲイの男性とレズの女性、そして女性解放論者が連帯して、それを打ち砕こうという連帯関係が打ち出されたのである。そのために、かつては天敵であったゲイの男性とレズの女性と女性解放論者が、ともに異性愛者の家父長制社会の犠牲者であったことを認め合い、ともに権利を得ようとして成立させたのがクィア理論であったのである。そのために、レズビアン運動、ゲイ運動が展開されるようになり、さらに性的欲望によって揺れ動くバイセクシャルが加わり、LGBと言われるようになったのである。

このような、偏った考えによって一般的な家族や夫婦の在り方を否定し、家庭を破壊しようとする考えが、LGB を認めさせるためのクィア理論の根本にあることを知らなければならない。家庭は、愛の学校と言え、四大心情を育む土台である。そして、愛に満ちた家庭には、家族のそれぞれの役割や位置の違いはあっても愛の満足度に差はなく、差別などないのである。

(3) 性の多様性に利用されているトランスジェンダー

トランスジェンダーの人は、心と体が逆であると感じてはいるが、普通の男性、女性として認めてほしいと思っているだけである。すなわち、性の多様性を求めてはいない。しかし、より同情を得やすいため LGBT と同性愛者とくっつけて利用されている場合が多く、当の本人たちは求めている方向とは違う理解によって迷惑がっている場合が少なくないようである。

第2節 性の多様性ではなく本来は二つの性と個別相



性の多様性 - LGBT 法連合会図改

男女は、生殖器において分かれ、量的、質的な違いが相互補完的になっているが、個別相による違いがある

最近、性の多様性ということが言われ、社会的に構築された男女のアイデンティティーをジェンダーと言っている。バトラーは、今までの不完全な二元論的なジェンダー観は間違えなので男女のジェンダーも間違えだと言うのである。最近では性的自認、性的指向の在り方によって性の多様性があると言っている。その代表が LGBT と言われるものである。しかし、本当に性の多様性があるのだろうか？これは、考えるべき問題である。

(1) 生殖器によって分かれる男女と個別相

体を見れば、生殖器において分かれている。この二つ以外に性があるわけではない。こういって両性具有の障害があるというものもあるであろう。両性具有者は生殖器が性分化の際に不完全な形で分化されて形成したという問題であり、この場合は両性の生殖能力が機能しているわけではなく、異性の生殖器が不完全な形で形成されたり、本来の生殖器も不完全な場合があるという障害である。これと、完全な男女の体を持つ LGBT とは別の問題である。脳がホルモンで男女逆に形成されたという見解もあるが、男女の

脳に大きな差がないことから、これを原因ということは科学的問題がある。(第4章 LGBTの科学的原因の考察参照)

しかし、確かに男性と女性も様々な能力差はあるであろう。これについて、統一思想では性相[※]と形状の二性性相(心と体)の属性としての陽性と陰性の二性性相(主体的と対象的)の相対的關係があり、相対的な量的、質的な差異によって、陽性実体と陰性実体が成り立っていると捉える。陽性実体、陰性実体とも量的、質的な差異があつて、体格差や能力差があり、これを個別相と言う。陽性実体と陰性実体とは人間においては男性と女性である。男性と女性の差は、体は、量的に男性のほうの陽性が多く(一般に、男性の方が筋肉質で平均的には身長が高く、女性の方が滑らかで皮下脂肪があり身長が低い)、心は、陽性と陰性のバランス自体は男女差にそれほど差がなく個体差が大きいのであるが、男性と女性には、下記の男女間の心における陽性と陰性の質的な差異の例のような質的な差があると捉えるのである。

性相(心)と形状(体)の属性としての陽性と陰性の表 (新版 統一思想要綱 p.41)

		陽性	陰性
性相	知	明晰、記憶、想起力、判明、才致	模糊、忘却、記銘力、混同、生真面目
	情	愉快、騒がしい、喜び、興奮	不快、静肅、悲しみ、沈着
	意	積極的、攻撃的、創造的、軽率性	消極的、包容的、保守的、慎重性
形状		隆起部、突出部、凸部、表面	陥没部、孔穴部、凹部、裏面

※ 性相とは、人間では心に相当する目に見えない無形的、機能的側面をいい、形状とは人間の体に相当する目に見える有形的側面のことを表す統一思想用語であり、形状は性相が形となってそのごとく表れたものなので、双方を合わせて二性性相と表現する。陰陽とは東洋哲学においては、陽は光、明るさを意味し、陰は蔭、暗さを意味し、そこから発展させ、主体的要素と対象的要素全般の概念に当てはめている。ただし、統一思想においては性相と形状の属性として、陽性と陰性が相対的關係(相互補完的關係)にあると見る点が、東洋哲学と違うところである。

男女間の心における陽性と陰性の質的な差異の例 (新版 統一思想要綱 p.45)

			男	女
陽性	知	明晰 才致	包括性 大胆さ	縮小指向的 細密さ
	情	積極性	硬性	軟性
陰性	意	悲しみ	悲痛 無表情	悲哀 たやすく涙を流す

(2) 個別相に由来した多様性と性自認、性指向を変える後天的可能性

スポーツが優れている女性は確かに一般の男性よりも運動能力が上で一見男勝りで活動的である。しかし、頂点を極めた男女の姿を見ると優れているにしても違いを感じる。男性よりも男性らしいように思われた女性の運動する姿にも、女性らしい美しさがあることがわかる。格闘技等では女性も荒々しく見えるが、男性のそれよりはどこか、柔らかさを感じる。そのように質的な差がある。個別的なバランスの差はあるものの形状的には生殖器を中心とした量的な陽性と陰性の違いが、心においては質的な陽性と陰性の違いがあると捉えるのが統一思想である。それゆえ、闊達に見える男女にも印象において違いがあり、物静かに見える男女にも印象的な違いを感じるようになるのである。こう見れば、このような違いが

ある理由がわかる。このような違いそのものは、個別相に由来した多様性である。このように、静かな男性、闊達な女性の能力や性格を解釈することができる。ゆえに、そのような素養があること自体に本来は何の問題もないのである。

残された問題は性自認と性的指向のみである。同性愛は異性を奪い合う争奪戦を減らすためとか、女性の繁殖力を増すためとか解釈されている。しかし、それらの理由は精神的で知的存在である人間であるならば他の選択肢が可能でそのような方向性である必要はない。

何かがあって性自認のアイデンティティーを喪失させたり、変えたくなくなったりすることはないだろうか？性指向を変えたくなるような、あるいは無意識に変えてしまうような出来事があるのならどうであろうか？そういうことが成長期間の中でさかのぼってあるのであれば、それが原因であると考えられるのである。これについて、キリスト教の同性愛を扱う団体では多くの人々が異性愛者となるようカウンセリングを受け、異性愛者として克服したのちに、自分の人生を振り返る告白をしている。この内容については、LGBTの原因と克服のところで後に吟味する。

私には、なぜ男性と女性はまったく同じだと主張し、男女のすばらしい違いを否定しようとする人々があるのか理解できません。共に力を合わせれば、神にとって何かすばらしいことが出来るのです。神は、私たち一人ひとりをお造りになりました。更に有難いことに、全ての人々を愛し、愛される存在にして下さっているのです。また、神の愛の一つの形が女性の愛で表され、別の形が男性の愛で表されています。どちらも愛するために造られていながら、それぞれの愛し方は個性が違い、「男性と女性は互いを補い合って完成されるもの」であり、神の愛を体現するには、どちらか一方よりも両方揃った方が、より神の愛に近づくことが出来るのです。神は私たちに「汝を愛するがごとく隣人を愛せよ」とおっしゃいました。まず正しく自分を愛し、それからそれと同じく隣人を愛しましょう。しかし神が自分をお造りになったことを受け入れないとすれば、どうして自分を正しく愛することなどできるでしょうか。

第四回世界女性会議 マザーテレサ（『歴史はいのちの反発と和合によって動く』P. 34～41の一部を抜粋引用）

第3節 性欲中心の関係の問題

異性愛でも、安易な婚前交渉は、多くの問題を起こすが、性的欲望を中心として、多くの性的行為をすることは性感染症、死亡に至る疫病や癌などにかかりやすい。

すでに述べたように同性愛者である男性は、エイズ、肝炎、淋病、肛門癌、胃腸内感染などにかかりやすいことが知られ、同性愛者である女性は、腔寄生虫症やB型・C型肝炎、エイズなどにかかりやすいのである。セジウィックの言うような同性愛が認められる世の中においては、同性と異性の間を行き来するような関係を持つものも少なくなく、家庭や子供にまでその影響は及ぶ可能性がある。

性革命によってもたらされた結果は、自由を約束するかに見えたが、作家マリンがいうように「不自由に拘束されていることを見出しただけ」であった。性欲を中心に安易に好き嫌いで性的関係を結ぶことは多くの危険をもたらしたのである。

肉体的な危険だけではない。過大評価された関係は、情緒を失った本能的なものに成りやすく、異性愛であっても、『パートナーを変えたり、行為を多様化させたり、快感を得ようとしても「倦怠感と感情の欠如」をもたらす』と女子大生が語った（人格教育のすすめ p.381）ように性的快感すらなくなり、情緒の不安定をもたらすのである。また、盲目的な恋愛により関係を始めた大学生は、「私の友達が見えなくなり、新しい友人もつくり、何の活動も参加しなくなりました。すべてが彼によって吸い取られてしまいました。私が一人の人間として成長できたのは、友達と共に過ごし、ボランティア活動をし、遊び散歩した時でした」（同 p.400）と語った。ある精神科医の女医はこう語った。「あまりにも多くの相手に、何の意味もなく私の重要な部分を与えることになってしまっていました。しかし、それが今では痛みになっています。長い間にわたって非常に大きな代価を払っていたことが気が付きませんでした。」（同 p.399）

つまり、性的行為に至るには基準がなければならないのである。性的行為が真の愛を動機とするものであるならば、相手に対する危険を望む者はいないだろう。健全な性の関係は結局、真の道徳に根差したものでなければならないのである。

第4節 健全な性関係とは？

では、健全な性関係とは何であろうか？

統一原理では、成長期間を経て、時になった時にふさわしい相手と神に祝福されて結婚したのちに性的関係は行われるべきものであったと見ている。「人格教育のすすめ P.388」によると精神学者であるハートは「正しい時に、正しい相手と、正しい条件が満たされたうえで」結ばれることが正しい性関係であると述べている。下記はその内容に捕捉を加え作成した。

正しい時とは、（自己抑制が必要な時があるということ）

- ① 肉体的な成長期間、適齢期まではさける
- ② 勉学などが必要な期間はさける
- ③ 社会的に一定の立場を得るまでの期間はさける
- ④ 成約をし、正式な結婚をするまでの期間はさける
- ⑤ 人格的に互いを知り合う期間はさける
- ⑥ 結婚後も身体的条件、互いの心情的な準備などの条件が整うまでの期間はさける

正しい相手とは

- ① 18歳以上の適齢期
- ② 相対的關係（相互補完的關係）であり、性的な完全な結合が可能な相手
- ③ 理解し合え、相補的な協力が可能な相手
- ④ 永遠に愛し合えると誓える相手
- ⑤ 愛と性と生命の関係を崩さず、四大心情を育むのに適した相手

正しい条件とは

- ① 双方の同意
- ② 生活が可能なお場所があること
- ③ 神に誓った正式な結婚をすること
- ④ 子供の養育が可能なおこと

第5節 不健全な性関係とは？

第4節の内容から、不健全で非倫理的な関係とは何かを論じてみる。それは健全な性関係のまさに逆の関係である。これ以外の誤った条件下で、誤った時期に、誤った相手と、誤った動機によって性関係を結ぶことである。そのように考えると、LGBは、相対的（相互補完的）な性関係でなく、愛と性と生命の連結が不能であり、四大心情圏を育む相手として支障が生じる。また、多くの場合は、固定したパートナーで長くいることさえも難しいと言われている。このようなことから、健全な性関係とはいいがたい。

もし、一時的な感情における性行為であるならば、将来本来の相手となるパートナーとの一体化を妨げる。それは異性愛であっても、過去の性的な履歴は本当に愛したい相手との行為を空しくする。

通常の夫婦関係でも、若い夫はこう語ったという。「私が妻とキスをし、愛の行為を行うときはいつも、あの子は妻よりキスが上手であったとか、別の子はあることがもっと上手だったという記憶が思い出されるのです。私はそのせいで妻を愛することに集中できません。」（人格教育のすすめ p.413）と。さらに、本来ならば他に使うべき時間やエネルギーを浪費し、消費させられる。自分たちだけの世界に閉じこもり、本来の人間関係が難しくなり、時でなく、本来の相手でない性関係はそのような身勝手なものになってしまう。不可視性が隠れ蓑になってしまう同性愛はなおさらである。

また、第1章愛と性と結婚の第3節同性婚の子育ての問題点ですでに指摘したように愛と性と生命の関係が崩れた同性婚の子育ては、子供の精神にも倫理的にも大きな問題があるのである。

第6節 純潔から見た性革命の問題点（「人格教育」のすすめ P384～385 参考）

性革命は、「プレーボーイ」によってヘフナーが吹聴した「プレーボーイ哲学」に端を発していると言われている。彼はいかなる性行為も合意した者たちの私的問題であると言う。そして、独身のままで性行為を楽しむことが自由な生き方だと言ったのである。

その彼の思想の元となったのは、1948年に発表された性行動の研究の権威とされた「ギンゼー報告書」である。しかし、その報告書でギンゼーは、明らかに誤ったサンプルを用いている。彼が用いたサンプルの4人に1人は犯罪者であり、5%は男娼であり、彼が子供の性行動として用いたのは、なんと300人以上の犠牲者を出した1人の小児性愛者の報告を実は根拠とするものであったのである。

そのような観点からギンゼーは、人間には「性的はけ口」が必要であり、夫婦関係、婚前交渉、不貞、

さらに近親相姦や児童虐待ですら同等のものであり、不倫や猥褻な行動は不自然なものではないと断言したのである。ギンゼーの思想は、結局性犯罪者の思想をサンプルして、これによって同性愛、小児性愛をはじめすべての肉的な性愛行為を肯定化しようとしたのである。ギンゼーは中立的研究者ではなく、それが、ヘフナーが吹聴したプレーボーイ哲学の根本であった。

そして、そのプレーボーイ哲学を利用して、女性解放論や共産主義者においては愛や性まで共有しようとする発想が生まれたのであるが、純潔の観点を合わせて考えれば、性革命の失敗の理由は、自ずと答えが出てくる。性行為や体に革命の重点を置き、愛と性と生命の関係を切り離してしまった。愛と忠誠心のない性行為は、空しく満たされない。パートナーを変えたり、多様化させたりして解決しようとしても、さらなる倦怠感と感情の欠如をもたらす。本来の性行為は、心身ともに完全な結合があつてこそ完全なものとなるのである。心身の調和と四大心情圏の確立が必要なのである。父母なる神の愛を知り、純潔を守り正しい相手と、正しい時期に、正しい条件で、結婚してこそ、真の幸福が得られるのである。

第7節 純潔の責任（人格教育のすすめ P. 386～389 参考）

(1) 性的関係の影響は多方面に及ぶ

性的行為が真実の愛を動機とするものならば、いかなる場合においても愛する人を危険にさらすことはないであろう。つまり、健全な性は必然的に道徳と関連するのである。

性的な出会いは一時的なものではなく、性行為はパートナーの体だけでなく精神や心にも触れる。それは、パートナーの存在すべてにかかわることであり、人生を共にすると誓い合った二人を結び付けるものである。そして、友人、両親、生まれてくる子供の人生にもかかわる。

(2) 禁欲

性行為に対する不確定な関係は、情的心理的に障害をもたらすが、その直後は快樂や空想で心が奪われているため、不感覚になっているが、しばらくたつと大切なものを安易に多くの相手に与えてしまった後悔と痛みと虚しさにとられるのである。

不特定な相手との性関係は情的、道徳的、創造的、知的な面の成長にとって必要なエネルギーを若者から奪ってしまう。個人的成熟、専門職の知識や技術の習得、家庭の形成という本来の課題から目をそらしてしまう。逆に不特定な相手とのこのような関係を抑制するなら、個人的成熟、専門職の知識や技術の習得をし、その上で将来の相手のための準備をすることができるのである。

(3) 配偶者に対する責任

純潔は、将来の、夫あるいは妻に対して貞節を守ることを意味する。結婚後は配偶者を大切にし、思いやること、誠実であることによって信頼関係を保つことができる。

(4) 子供に対する責任

親は子供を愛し成熟させる責任がある。子供は当然父母が互いに愛しあっている姿を望む。全ての子供たちが自分を宿し、育ててくれた親の愛を誇れることが必要なのだ。

最近の人権教育では、自身の体は自分のものだから、自分の好きなように扱い、また、他人はそれを侵害してはならないという内容だが、これを性的な関係に当てはめれば、自分さえよければ、たとえパートナーがいても勝手に性的関係を持つても構わないことになってしまうし、年齢も時も関係なく同意がとればよいということになってしまう。これは、性が愛の器官であるという観点からすると問題を感じる倫理観である。

ここで、文鮮明先生のみ言葉集「真の愛を育む道」から引用する。

男性がなぜ生まれたかが問題なのですが、それは男性のためではなく、女性のために生まれたというのです。男性にとって最も重要なのは女性です。女性も、自分のために生まれたわけではありません。生きる起源は、自分ではなく、男性なのです。

女性が女性として生まれ、持っているその美貌は、自分のものではありません。胸は女性のものでしょうか。大きなお尻が女性のものでしょうか。女性のために、そのように生まれたのでしょうか。男性のために生まれたのです。また、男性の肩が大きいのは、いばって力を振るい、暴力の親玉になるためではありません。女性を保護するためです。それで女性はお尻が大きく、男性は肩が大きいのです。そのようになってこそ、バランスが取れるのです。

生まれたのは、自分のためではありません。自分のために生まれたと主張するようになるとき、真の愛はすべて破綻してしまうのです。真の愛は神様から始まりました。人類のためにいらっしゃる神様です。神様の愛は、与えて、与えて、与えて、忘れてしまうのです。それが真の愛です。(1986. 3. 14)

(「真の愛を育む道」文鮮明 P. 53)

真なる人権は人間が自分を主張するところにあるのではなく、父母なる神が人間を愛しているからである。それゆえ、他のために人間同士が生き合おうとするところに人権が保障されるのである。それゆえ、愛のために男女は創造されているのである。

私か語る純潔とは、一時期、女性だけに強調されていた封建的な純潔のことではありません。神様の大原則から見た、男女共通の純潔のことをいうのです。

それは、男性と女性が結婚するまで共に貞操を生命視してこれを守り、理想相対に出会って祝福を受け、結婚したのちには、主体と対象が限りなく愛し合いながら永遠に暮らす、一男一女の理想です。

私は今日、女性よりも、かえって男性の純潔を強調したいと思います。今日、世界の男性たちが節操のない愛によって転落することで生じる被害が、全人類の幸福を破壊する原因になっていると言っても過言ではありません。(1995. 8. 23)

(「真の愛を育む道」文鮮明 P. 62)

第4章 LGBTの科学的原因の考察

目次に戻る

第1節 LGBTに先天的生物学的な有力説はない

医学的生物学的問題は、何個か仮説があるが完全な有力な説は現在のところ発表されていない。母体の受けたストレスにより、ホルモンバランスが崩れ、生殖器と違う男女逆の脳の構造になるという説が有力だった。しかし、英国の研究結果およびイスラエルの研究結果でこの学説の根拠は崩れた。英国では、6,000件を超えるsMRI（構造的MRI）画像で空間的立体的構造を解析し、統計的分析のなされた複数の研究を収集し、様々な角度からそれらを統合したり比較したりする分析した結果（メタ分析という）、海馬や脳梁の大きさ、言語処理の方法など、これまで「男性脳」「女性脳」の根拠とされてきた脳の性差は実際には存在しないことが判明した。また、イスラエル、テルアビブ大学のダフナ・ジョエル（Daphna Joel）氏のチームは、13歳から85歳の被験者1400人の脳スキャンをとって各脳領域のサイズとともに、領域間の接続の差異も調べた。全体では、自己認識が男性である人と女性である人でサイズが異なると一般に考えられる29の領域について調査した。個々の脳スキャンを見たところ、性別によって持っている想定された脳の特徴をすべて有する人はごく僅かしかいなかった。全被験者のうち、定義に基づく完全な男性脳または完全な女性脳を持つ人は0～8%であった。「ほとんどの人の脳は中間的だ」とジョエル氏は指摘した。

上記から、脳そのものには、男女に大きな違いはなく、それがLGBTの直接的な原因になるとは思えないのである。ただし、脳の働きにおいてはいくつかの違いが発見されていることから、男女の脳の働きにおける事実上の性差は存在していると見るのが妥当である。

「脳の血流量が女性のほうが多いという研究」

https://www.excite.co.jp/News/odd/Karapaia_52244001.html

「男性の脳と女性の脳の働きは異なることが判明、動物実験の見直しへ（米研究）」

<http://karapaia.com/archives/52202127.html>

「男と女は「美」の把握が異なる：脳の研究で違いが明らかに」

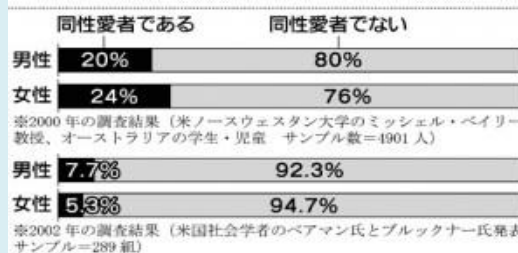
<https://wired.jp/2009/02/26/>

ここで、世界日報の記事から引用する

LGBTは先天的な生まれつきのものか、研究が続けられている。现阶段では同性愛の遺伝的な因子があるか調べているが、見つかっていない。一卵性双生児の場合、双子の中の1人が同性愛者であれば、遺伝的要因ならばもう1人も同性愛者になる確率が高いわけだが、2000年の調査結果では、男性の場合、その確率は20%。女性の場合、24%。2002年に行われた別の調査で結果は男性の場合、7.7%、女性の場合は5.3%でもっと低い（図表参照）。

これでは先天的な遺伝的要因と断定できる説得力はない。少なくとも7割以上が、片方が同性愛では

同性愛者の遺伝的要因是非に関する調査研究結果
■ 一卵性双生児の片方が同性愛者の場合、もう一人も同性愛者である割合



ないとすれば、逆に後天的な環境要因がかなり大きいと言える。先天的な遺伝的要因は、ある程度は認められるが、先天的な遺伝的要因よりも後天的な生まれた後の環境要因によって同性愛者になる場合が圧倒的に多いと結論づけられるだろう。

(説得力欠く同性愛の遺伝的要因説 中華圏に浸透する同性婚(6) 香港の精神科医・康貴華氏に聞く(上))

統一思想によれば、心には、霊的な心(真・美・善を求める心)と肉的な心(衣食住性を求める心)がありその授受作用(相互作用)によって、形成されると捉える。また、肉的な心も脳だけで形成されているものでなく、心は体全体のどこにでもあり、脳は情報処理の器官のようなものであり、心の形成には体全体が関連していると見るのである。

脳の構造の変化がLGBTの問題と考えるよりも、胎内での親のストレスや心情が胎児の心身全体に科学では解明されていない何らかの影響をもたらしている可能性があることも考える必要がある。その問題の中には霊的な問題も非科学的と言って無視してはいけない問題であると思われる。例えば、認知症の経過中に解離性同一性障害(突然、異性的な行動や発言をする)が示された例もあり、LGBTの問題は、単に物理化学的な問題だけで解明しきれない問題もあると思われる。(認知症の経過中に解離性同一性障害を示した1例 認知リハビリテーション Vol.19, No.1, 2014 参考)

第2節 脳の構造による後天的問題の可能性

(1) 大脳辺縁系の情的記憶の影響によるLGBTへの可能性

「統一思想と心脳問題 石井洋著 p.108」によれば、脳の内側面である大脳辺縁系は情的処理過程を担っており、扁桃体を通る情的経路は無意識に身体反応に伴ってエピソードを把握し、悪い経験や記憶が無意識のうちにフラッシュバックしたりする。知的処理の情的処理よりも情的処理の知的処理の影響が大きいとも書かれており、また、情的処理システムは自律神経系や内分泌系を通して身体反応に大きく影響を及ぼしていると書かれている。ウィキペディアによれば、「大脳辺縁系は、内分泌系と自律神経系に影響を与えることで機能している。大脳辺縁系は、側坐核といわれる構造と相互に結合しており、これは一般に大脳の快楽中枢として知られている部位である。側坐核は性的刺激、そしてある種の違法薬物によって引き起こされる「ハイ」な感覚と関連している。」とあり、情と性的刺激に関わる機能を持っていることがわかる。

さらに、石井洋氏は、「情の働きは①評価②修飾③共鳴であるとし、脳全体の活動を共鳴化させるだけでなく、心と身体をも共鳴化させる働きがあるとしている。そして、情は、脳のプロセス全体を評価し、脳と身体の働きに影響を及ぼす」(「統一思想と心脳問題」 p.109) とある。

四大心情の発達過程の中で幼児期、学童期、思春期、青年期などに強く情に問題を起こすような事柄がある場合、大脳辺縁系の情的記憶が無意識に蘇り、性的な影響を及ぼすと仮定すると、性的なアイデンティティーを変え得るものと考えられる。

(2) 幼児期のストレス反応によるLGBTへの可能性

また、「ストレス反応とその脳内機構 尾仲達史著」によれば、幼児期体験は、その後のストレス反応を長期間にわたり変容させることが知られている。幼児期に虐待を受けると、大人になってからのストレス反応が増強するという。このようなことから、幼児期の性的虐待等の行為は、大人となってからも大きなストレスとなって同様に性的なアイデンティティーを変え得るものと考えられる。

すなわち、上記の脳の機構における二つの論文から、幼児期の体験はLGBTの大きな要因となりうることは容易に推定できる。

(3) 性同一性障害に後天性の可能性

ニュージーランドの遺伝学者N・E・ホワイトヘッド氏は、トランスジェンダーは複雑な要因が考えられるが、生理的要因の根拠は乏しく、恐らく5歳以下の幼児期に苦痛な経験をし、逆の性へ逃げ込んでいるという仮説を立てている。(性同一性障害 Q&A クリスチャンとして考える Q36) さらに、「自分は男性の中に閉じ込められた女性だ」と主張する知人3名に精神治療を施し、自分は間違えだったということを悟らせ、男性としての生活に戻ることに成功しているのである。(性同一性障害 Q&A クリスチャンとして考える Q30 内)

また、ノルウェーのオスロ大学では性同一性障害と診断された52名について、視覚能力、言語化能力、認知能力などを調べるとそのパターンは本人の主張する性でなく、身体的性と一致しているという診断結果が出たのである。これは、本人の訴える「性的違和感」を鵜呑みにするのは妥当ではない事の科学的な警告と言えるのではなからうか。(性同一性障害 Q&A クリスチャンとして考える Q30 内)

このように科学的研究の成果は、LGBTの問題は、精神的問題が脳に作用して、ある種の拒絶感や発達障害、逃避、依存症を起こした結果である可能性が高いことを示していると思われる。

第5章 成長期間におけるLGBTの原因と克服条件

[目次に戻る](#)

LGBTは生まれつきとの見解もある。しかし、これから紹介する内容は、その見解には、根拠がないこと、むしろ、多くの人が後天的内容でLGBTとなった事実を、事例を通じて紹介している。

「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～という本を執筆中に新たに参考文献として購入したが、同様に成長過程を振り返ることが重要だと書かれていることに驚いた。下記のような内容が書いてあったからである。

「同性愛者は本当に変わることができるのか？」という疑問を真剣に見つめました。・・・同性愛から脱出を助ける団体のリーダーたちは、脱出の道を探し求める多くの男性や女性と話していくにつれ、

助けを求めてくる人たちの背景に共通の要素があることをいくつか見出してきました。そういった主なパターンが表れる主な領域は次の通りでした。

◇幼少期の成長過程

◇家族背景

◇気質と興味

◇友達からのプレッシャー

◇性的虐待

・・実話や洞察は、レズやゲイのアイデンティティーや思いや振る舞いを解き放つカギとなるものです。・・根源を調べる理由は、同性愛がどのように育まれていったかを理解することが、真の解決に至る道を指し示してくれるからです

(「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM 出版 P. 88)

これは、まさしく、私が推定した内容の通りであった。

その他、世界日報の記事「説得力欠く同性愛の遺伝要因説」の香港の精神科医・康貴華氏の解説も参考にした。この医師も同性愛者が異性愛者に戻ることは可能であると言っている。また、当事者の個人のブログや書籍を参考にさせていただいた部分もある。原因というよりも LGBT としての行動を選んだきっかけとなった内容も含まれるが、先天的後天的要因が総合的に絡み合っ て LGBT として生きるようになったという意味において後天的原因と解釈して年代別に整理していきたいと思う。

第 1 節 親の愛情と幼児期(胎児～6 歳)における問題

統一思想から見ると、幼児期は父母から無条件に愛されることを経験し、愛されている実感を得ることを通して「心情の原型」が築かれ、情緒や感性、創造性が育まれる時期である。赤ん坊が生まれてから最初の 1～2 年は、母親と深い安心感を伴う絆を育む時間を持ったほうが良いと一般的には言われている。また、父親のサポートも重要だ。そういった中で、親の愛情に喜怒哀楽を表現するとともに、親を喜ばせたいという「子女の心情」が成長するのである。逆にここにおいて、幼児期に親が無条件に愛することが出来ず、親の愛を感じられなかった子供は、心情の原型に歪みが生じると考えられる。

この時期は、吸収精神が旺盛な時期で体と共に脳も急速に発達する時期であり、人格の基礎となる気質が築かれ、それが後の性的なアイデンティティーの原型ともなる。この時期に問題があると、子供は、ネガティブな性格になる傾向がある。個性によって、それは、引っ込み思案や無気力、受動性という形で現れたり、あるいは強い攻撃性やコントロールできない感情という形で現れたりする。片親または両親とも無関心だったりすると「疎遠による不安」を感じ、その後の人生の中で、他の誰かに依存したいとか、自分のアイデンティティーを他の誰かに求めたいという激しい衝動となって、あらゆる危険に身をさらす可能性がある。また、危険の中には、性的アイデンティティーを変える可能性も含まれるのである。

(1) 親が支配的、無関心、何らかの中毒症

親の愛を感じることが出来ず、威圧的に感じたり、疎外感を感じたりする。自分の生まれた原因に対するアイデンティティーを持つことができない。

小さな男の子も、死や離婚によって父親をなくすということがあがるが、それはトラウマ的な出来事となり、その少年を男性からの愛と保護への渴望にと向かわせることになる。そして、その代償を同性に求めることが起こる。また、同性愛の傾向を持つ男性の父親の多くは、ノーマルな「感じのよい人」ではあるが、感情的には疎遠で関わりの薄いタイプの父親が多い。このような父親のもとで育った子供も同様に父親の愛を感じることが出来ず、情熱的な同性に愛の代償を求める傾向があると報告されている。

(2) 親の夫婦関係の問題や片親の不在

上記における無関心の原因や後の(5)での母親のストレスは親の夫婦関係の問題である場合がある。場合によってはまだ夫婦にもなっていない事さえある。このようなしっかりと愛し合っていないカップルである場合や愛が成熟していない場合などは子供ができたことに男性が不満を感じたり、暴力をふるったりすることもあるし、母親自体が強いストレスを感じることも多く、出産後も精神的に不安定になったり両親からの愛が偏ったりする。また、片親の不在においての愛の偏りは特に五歳以下の子供にとって、両性の親の愛から満たされていないという心情の傷となり、性的アイデンティティーの基礎に偏った歪みを生じるのである。同性の親からの愛の不足を、同性に代償として愛を求めたり、異性の親の暴力の恐怖心から同性に代償として愛を求めるなどの問題が生じる。

南カロライナ州立大学医学部のジョージ・A・リーカーズ博士は、トランスジェンダーの男子46人の内、性別違和感のひどい子すべての父親がいないことを見出した。軽い違和感を持つ子でも、半数以上は父親がいなかったのである。父親が家庭を捨てたのは、8割の子供は、5歳以下だったのである。(性同一性障害 Q&A クリスチャンとして考える Q36)

(3) 親の教育方法・教育指針

- ① 親からLGBを肯定する教育を受ける
- ② 親の一方的な意向によって異なる性自認を植え付けられる

男の子が欲しかったのに、女の子が生まれた場合に、親が子供を「男っぽく」あるいは「男の子」として育てようとする場合である。またその逆のパターン(男の子⇒女の子)も当てはまる。子供の誕生時のこの親の思いからくる行動は胎教から幼児期の声掛けや着せる服装などに現れて子供の心情に大きく影響を及ぼし、ある意味トランスジェンダー等の先天的に近い原因ともなり得ると考えられる。実際、このようなケースで女性であるが男性的になり、それゆえレズとなったという報告がなされている。(このような場合、最近ではレズとは言わないらしいが・・・)

(4) 親に性的なアイデンティティーを否定的に見られる

元気のいい女の子や芸術的な感性豊かな男の子が父母のどちらかの願いに合致せず、この子男の子みたい、あるいはこんな子男らしくないというような見方をされた場合、アイデンティティーに混乱が起き問題が生じたり、片親に愛されない欲求が性的指向に結び付いたりしてLGBTの要因になることがある。

また、同性の親に否定されたために異性の親を自分の行動の手本にするというような報告がなされている。

母親との絆が二回も破損した女性、テリーの実話を引用する。

「まず最初に、私は養子でした。産みの母は十五才で、六人姉弟の一人でした。母の妊娠には多くの恥と秘密が伴いました。母の妊娠のことは、母の父親も知りませんでしたし、母を妊娠させた相手の男性も知りませんでした。生後数ヶ月間、私はいくつかの家庭に里子に出されましたが、そこで何が私に起こったのかはまったく分かりません。私が四ヶ月の時に、養父母が私を引き取ったのです。」母が私の写真入り成長記録をくれたので、読んでみました。私が二才の時、母はこう書いています。「テリーは、男の子しか遊び相手がなく、かなり荒っぽい子どもになってきた。」

自分が育てにくい子どもであることを知っていました。母は決して私に「愛してる」とは言ってくれませんでした。私たちはお互いにまったくつながりを持っていなかったと思います。

愛や愛情は、父親からのほうがもっとたくさん感じられました。だから私は自分を父と同類とみなして、父の助手、父の影となったのです。」

「私はしょっちゅう男の子と間違えられました。幼稚園の時の写真では、私はネクタイをして、兵隊の帽子をかぶっています。私の性的アイデンティティーは幼児期から問題があったと思います。」
(「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM 出版 P. 92)

テリーは、本来の母親に愛されなかったとともに、養母にも愛されなかった。さらに、元気な女の子は、ますますおてんばとなり、愛してくれる養父から男っぽさを吸収し、男っぽい性格となったとともに、女性の親から愛されない渴望をもって心情の基礎に歪みが生じたと考えられる。

父親に男の子としてのアイデンティティーを否定されたフィルの実話を引用する。

「僕の父は地元でシボレーの自動車販売店を経営していました。僕たちの住んでいた小さな町の人たちは、父が好きで、父を尊敬していました。僕の二人の姉は、一九五〇年代の初めに生まれ、僕も数年後に生まれてきました。父は自分に「せがれ」ができたことを本当に喜んでいました。父は、僕と二人で一緒にフットボールを投げ合ったり、マス釣りしたりするんだという、大きな夢を持っていました。」

「僕は父を喜ばせたいと思いましたが、父はあまり家にはいませんでした。大人になった今は、父の仕事がどれだけ忙しいものであったのか理解できますが、その頃のまだ子供だった僕には、ただ父と一緒にいないことが多いということしか分かっていませんでした。だから、父がやっとなら僕と遊べる時間を持っても、僕は恥ずかしくて、不器用なことしかできませんでした。僕が男であるということに父が当初抱いていた熱意は、すぐに気まずさにと変わっていきました。僕は父が期待していた息子ではなかったのです。」

フィルが生まれてから三年後に、弟のマックスが生まれました。フィルの問題はそこから本格的に始まりました。「マックスは歩けるようになった時から、外見上も振る舞いも、まるでアメフトのラインハッカーの小型版のようでした。僕は、父がマックスを天井に向かって放り投げながら、

顔を輝かせるのを見ていました。マックスが甲高い歓声を上げる中、父は「こいつが、俺のせがれだ！」と叫んだものでした。「こいつが、俺のせがれだ！」それなら、僕は何だったのでしょうか。「パパは僕を好きじゃないんだ」と考えるようになった僕は、恥辱と落胆とで心がちくちく痛みました。それ

以降、僕はほとんど完全に母と姉たちとの関わりだけにと引っ込んでしまいました。」

(「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM 出版 P. 93～94)

彼は、芸術的で感性豊かな資質を持っていたが、父親が自分中心の思いで、彼を男性らしいと思わず愛さなかったのである。父親に認められたいという思いを否定された彼は男性としてのアイデンティティーに問題を感じた。そのために、そばにいてくれた母親を自分のモデルとし、男性という立場を離れ、母親の身ぶりや自己表現の仕方、そして母親の人生観をそっくり取り入れた。この結果、父親の愛情や導きや保護を渇き求める気持ちがどんどん大きくなって男性への性的指向へと結び付き、女性的な性格のゲイになる心情的な土台を作ったと言える。

(5) 母親が妊娠中に受けたストレスなど

オランダの神経科学者、ディック・スワープ教授の長年の研究によれば、妊娠中に様々なストレスにさらされた女性の子どもは、将来、同性愛者になる可能性が高いと報告されている。ホルモンバランスへの影響も考えられるが、胎児の精神的、心情的な歪みの原因となると考えられる。

(6) 性的虐待の経験

幼児期の性的虐待は記憶には残らない場合もあるが、心情的な傷となり、自分の性的指向や性的アイデンティティーに混乱や不安を覚え、結果として LGBT になることが報告されている。

(7) 保育園や幼稚園での疑似異性的な体験

(3)のような願いを持って生まれてきて無意識に親に刷り込まれてしまった心情が、学芸会のようなもので異性の服を着て演技するなどの体験があると、その心情と一致しているという喜びが生じ、それがきっかけとなり、トランスジェンダーになったと考えられるケースがある。

(8) 興味本位の自慰行為

最近ではマスターベーションの教育が小さいころからされたり、教育された上の子供から教えられたりしてしまう場合がある。このころはまだ、性欲自体はほとんどないが、遊び半分で同性を思い浮かべて行えば、それが性的指向を変えてしまう情的記憶になりかねない。

ここで、韓鶴子総裁のみ言葉を紹介する。

家庭は、子女の内的成長に決定的要素を提供します。天の基本的な性稟と生活態度は、家庭で形成されるのです。赤ん坊は愛を感じる天賦の素質を持っています。非常に小さいころから、母親の愛情にあふれた懐を他の女性の懐と区別できるのです。父母の愛と兄弟の愛を自然に体得して育ちます。人の情緒と性格の大部分は、赤ん坊の時の家族関係を通して体得され、愛情と幸福感が基礎となって形成されるのです。

(韓鶴子総裁御言葉集2 鮮鶴歴史編纂苑 理想家庭と平和世界のモデル p.182)

それでは次ページに幼児期に考えられる LGBT の原因と克服条件と考えられる内容を紹介します。

LGBT の原因	
幼 児 期	① 親が支配的、無関心、何らかの中毒症
	② 親の夫婦関係の問題や片親の不在
	③ 親の教育方法・教育指針
	④ 親に性的なアイデンティティーを否定的に見られる
	⑤ 母親が妊娠中に受けたストレスなど
	⑥ 性的虐待の経験
	⑦ 保育園や幼稚園での疑似異性的な体験
	⑧ 興味本位の自慰行為

(幼児期は親の影響による性的アイデンティティーの喪失の可能性が高いと考えられる)

※LGBT の克服の条件

ここでの LGBT の心情的問題は特に胎児から 3 歳児くらいの期間は記憶にも残らず、潜在的に心情の方向性に影響するもので、ほぼ先天的指向と同様のものとなる。自分で意識することもなくそうになってしまう。同性愛者の方々にとっては、異性を愛することよりも同性を愛することの方が「自然」だと感じる要因となり得る。

聖書には、「イエスは答えて言われた。『はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。』(ヨハネ 3:3)」と書かれている。これは、性的なアイデンティティーで言うならば、「この世の価値観でもって許されているからと言ってその性的なアイデンティティーのままではいけない。神様を父母として迎え、神様が与えられる性的なアイデンティティーをまず、持つことが必要だ」ということである。

幼児期の心情的問題は、神様の愛をその代身として生んでくれた親から感じるができなかったから生じたのかもしれない。しかし、親を怨むのではなく、この世ではすべての人が足りない部分は持っていて過ちを犯すことがあるということを知って許すことが必要である。

「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだので

す。すべての人が罪を犯したからです。」(ローマ 5 : 12)

そして、次に神の息子、娘として人は創造され、男と女が愛し合うために創造されたことを信じるのが大切である。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」(創世記 1 : 27)

「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」(創世記 2 : 24)

このように、男女が結ばれることを意図して神は男女を創造されたのである。

人間が精神的にも身体的にも愛し合い、結合できるようになっており、そこから血統がまじりあって子供ができるようになっていることは明らかである。男女の相対的關係は進化では説明できず、愛のために創造したという説明以外には成り立たない。したがって、これを創造した神の愛を受け入れることを信じることから始めなければならない。

LGBT を克服したいと思うときに自分の成長過程の中で記憶にあるもの聞かされたものを整理して、もし、内容の中で特に恨みや悲しみを感じたような経験があつて形成されたようなアイデンティティーであった場合、その恨みから解き放たれるのは容易ではないと思われるが、それが真の幸福を得るためのアイデンティティーには成り得ないことを考えながら、本来のアイデンティティーを取り戻すきっかけをつかむことが必要と感じる。また、とくに、悪気を感じないようなものであつても、自分がその意思を示したきっかけを見出し、自分を見つめなおすことが大切と思われる。

第2節 学童期(6歳～12歳)の問題：兄弟姉妹の心情、友情関係の芽生え、学校教育により規則を学び始める時期

統一思想から見れば、親から愛を受ければ、親に良く見られたい孝行したいという「子女の心情」の心情を土台として、「兄弟姉妹の心情」が芽生え、その応用としての友人関係が人生の良い意味でも悪い意味でもだんだんウエイトを占めてくるのは、この時期からである。

自分と異なる他者との交わりを通して、社会の規範やルールを学ぶ時期である。10歳を超えると生殖器がやや発達しはじめ、身体的な変化が表れ始める時期である。また、規則が必要であることがわかってくる時期で道徳を学び始めるのに適した時期である。

家族の絆も、これまでと同様大切だが、学校の先生や友人関係において、この時期に善悪の判断の基準の原型を学ぶことが多い。性的アイデンティティーの「型」が小学校に上がる前までに形成されるとすれば、小学校時代とは、その「型」が柔らかい濡れたセメントでいっぱいになり始める時期と考えられる。

(1) 学校教育でLGBを肯定する内容を教えられる

幼少期に親が支配的だったり、無関心であつたりして、愛を十分に受けられなかったりした場合、その上でLGBの教育を受けるとそのなかに自分の心の穴を埋めようとする立場を求めてしまう可能性が考

えられる。また、子供は公的なものを信じるので、親の教育と学校教育に差がある場合には教育の違いにアイデンティティーの混乱が起こる危険性がある。

(2) 異性に否定されたり暴力を振るわれたりする。

異性に極端な否定をされたり、暴力を振られたりすると異性に対する拒絶感から同性愛になるケースがある。また、性的アイデンティティーを否定されるひどいあだ名や、中傷をされたりすると、友達と自分は違うのだと思うようになる。

(3) 同性間の性的いたずらや異性からの性的虐待を受ける。

異性からの暴力的性的虐待で心情的感性が傷ついてしまい、それゆえ、同性に性的慰めを求めたり、逆に同性間の性的いたずらがきっかけとなって異性に性愛を求める必要性を感じなくなったりしてLGBの方向に向かうことがある。

(4) その他の性的虐待

誰からであっても性的虐待を受ければ、性的なアイデンティティーの混乱を来す。これが、信頼すべき近親の人であれば、その影響は大きい。

性的虐待の中でも最悪は、親からの虐待である。バーバラという女性の実話より引用する。文章は、一部を省略し、表現を和らげた。

「私たちの家族は、外側から見るとけっこう普通な家庭だったと思います。母は看護婦で、午後三時から十一時までの時間帯で病院に勤務していました。母はほがらかで、きびきびした、多忙な女性で、あまり感情に浸るようなタイプではありませんでした。私は母を尊敬し、母のような女性になりたいと思っていましたが、同時に母が私の顔を見る時間は全然ないように感じていました。母からの愛情や抱擁や励ましが、私には少しも足りていないように感じられたのです。」

バーバラの父親は科学の教師で、野球のコーチも務めていました。一人っ子だったバーバラは、放課後、父のいる職員室まで歩いて行って、そこから父の運転する車に乗って帰宅するのが常でした。春には、野球の練習にバーバラをお供させてくれることもありました。・・・「私は父のほうにもっと親近感を抱いていました。」

五年生から六年生に変わる前の夏、バーバラに身体的な成熟が始まりました。「私は誰にもこんな変化が気づかれぬようにと望みながら、だぶだぶのシャツやジーンズを身につけました。父は前よりもよそよそしい振る舞いをするようになりました。時々私のことを変な目でながめているのに気づいたこともあります。」・・・ある晩、バーバラはカウチソファの上に手足を伸ばしてテレビを見ていました。母親は仕事で、家にはバーバラと父親の二人だけでした。・・・「父が部屋に入ってきて、隣に座ってもいいかと尋ねました。・・・父は、私に愛や性について教えるのが父親としての役目だと言って、実際に私に性的行為をしたのです。」 この近親相姦は三年間続きました。バーバラは父親との性的関係を憎み、嫌悪しました。・・・

バーバラの憎しみのほとんどは、母親に対して向けられました。バーバラは思いました。「どうしてお母さんは、こんなふうに私をお父さんのもとに見捨てておくことができるの？ 何が起きているのか見えないの？」・・・「学校で友達ともしっかり時間を過ごすようになると、私は自分と父との関係がどれほど異常で恐ろしいものであるのかが分かってきました。・・・私の大きな目標は、高校卒業までとにかく生き延びることでした。そうしたら、私は永遠に家を出ていくつもりだったのです。」
 (「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM 出版 P. 102～104)

バーバラは、もともと母を尊敬していたが、多忙な母からはあまり愛されず、父親に愛されていると親近感を抱いていた。しかし、その父親から性的虐待を受けるといった信じられない事態が起これ、男性を信頼できないという決定的な心情の傷とそれを守ってくれない母からの愛の不足を同時に体験してしまい、その後の人生に大きな影響を与えてしまったのである。

(5) 親や周りの大人たちから逆の性だったら良かったのというようなことを言われる

周りに悪気はなくても、男勝りね、女の子みたいにかわいいね、みたいなことを言われると子供は、それを自分の指向の中で吸収する。

ここで、養母に愛されなかったテリーの小学校時代の実話を引用する。

「テリーはほんとに男勝りね」と大人たちは言うのでした。
 「そこに悪気はなかったのです」とテリーは回顧しています。
 「でも私は皆に言われたことを全部、深くまで吸収してしまっていました。私は自分が誰だか分かりませんでした。女の子であることを否定されたように感じたのです。私は女の子ではなく男の子として生まれてくるべきだったのだ、と思えました。」
 (「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM 出版 P. 98)

(6) 友達からのプレッシャー

女の子は異性を意識するのが意外と早く、友達が異性に興味を持っていると、スポーツなどに関心が高いと自分が特殊であるかのように感じる場合がある。逆に、スポーツをやったり、昆虫を取ったり、いたずらしたりする男の子の輪に入れない子供は、自分が別の存在であるかのようなプレッシャーを感じる。

LGBT の原因	
学 童 期	① 学校教育でLGBを肯定する内容を教えられる
	② 異性に否定されたり暴力を振るわれたりする
	③ 同性間の性的いたずらや異性からの性的虐待を受ける
	④ その他の性的虐待
	⑤ 親や周りの大人たちから逆の性だったら良かったのというようなことを言われる
	⑥ 友達からのプレッシャー

(学童期は、学校教育が価値観を大きく左右しはじめ、友人、周りの大人たちの影響が大きくなる)

※LGBT の克服の条件

学童期は、学校教育の影響も大きく受ける。それがたとえ間違っていたとしても世間を恨むべきではない。また子供同士の否定やいじめも神様の愛を知らずに行っているものである。何かの理由で受けた暴力や性的な虐待は、神の愛を知らないものが行ったことでそれを受けたものの罪ではない。そして、それで、もし性の本来の在り方を変えてしまうなら、過ちに屈し続けることになりそれは本心の願いではない。ゆえに、本心の願いを見直すところから始まるのである。また、褒められているようで、性的アイデンティティーを間接的に否定するような悪気のない声かけもあったであろう。しかし、それは無知からくるものと言える。

墮落した人間は、神様から見れば、皆、無知である。それゆえ、イエスは、十字架を付けた群衆に対して「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ 23:34) と言われた。神様を父母とするならば人々はみな兄弟姉妹である。自分のやりたい分野が一般の男の子や女の子と違って、それが男でない、女でないということではなく関心が違っただけである。本当に、男と女の違いから来たものなのか、あるいはその時の寂しさは何だったかなど考察することが大切である。心と体が一致した自分を過去の自分の中に見出すことはできるか？自分の本来の希望が傷つけられたり否定されたりしたことはないか？発見できるものがあれば、変わるきっかけがつかめると思われる。

第3節 思春期(12歳～18歳)の問題：性的な成長と共に、自己の人格を確立する時期

自立心が芽生え、友人関係や友愛を特に大切にす時期である。同世代の目を気にし、人間関係で一喜一憂するも、その中で大人に一歩近づく変化が見られる。この時期は生殖器が親になれるように準備が始まる時期であり、ホルモンバランスが急激に変化していき、男らしさ、女らしさが外見上にも表れてくる。また、性的に早熟な子と成熟の遅い子との差が表れ、どちらもコンプレックスになりやすい時期であるという研究がある。(「劣等感からの解放」健全な自尊心を持つ子供を育てるために ファミリー・フォーラム・ジャパン参考) 性的な知識への関心が高まり、通常、異性を意識する時期で、この時期に異性と人格的に接するにはどうしたらよいか、自分自身の性的変化に戸惑いながら確立していく時期であると考えられる。

この時期に、幼児期・学童期の性的アイデンティティーの問題が具体化する。心情の土台に問題がなければ、おてんばに思われた子も、繊細に思われた男の子も女らしく、男らしくなってくる。思春期の到来は、幼児期から小学校でのさまざまな出来事によって作られた人格や性的なアイデンティティーの土台がどのようなになっているかがわかってくる時代である。レズビアンやゲイの背景を持つほとんどの人は、小さな頃から自分は他人とは違っているというように感じさせられている出来事があり、周りから侮辱的なレッテルを貼られている場合さえある。そのように傷ついた心情から普通と違う愛の指向性が現れるとき、その子供には大きな衝撃が走ることになる。

(1) 性的違和感の解釈を性同一性障害、という情報を得る

この時期は、多かれ少なかれ性的な変化に対して違和感があるのは普通である。性的なものをコントロールできないことに対する恥じらいや嫌悪感というものが多かれ少なかれあり、精神的にコントロールしたいものほど、マスターベーションなどの方法は自己嫌悪となる。それは、人格を求める人間として、自己嫌悪を感じるのは普通の感覚である。ところが、性同一性障害の本にはそれを心が異性だからという理由で説明している。これがトランスジェンダーではないかと思うきっかけとなってしまふと考えられる。(性同一性障害って何?—プロブレム Q&A 参考)

(2) 部活動等の中でのプレッシャーや違和感

心情の方向がすでに LGBT の方向性にある子は、通常の間人間関係や活動の中で自分が求めているものとの差から無理を感じるようになる。このようなプレッシャーから自分と他者との違いを強く抱かせられる。友達との異性への関心の違いから、逆に同性への関心へと駆り立てられる場合がある。

(3) 同性間、異性間の性的トラブル

学童期の(3)(4)でも述べたが、この時期の性的虐待は、学童期と比べるとより性的なことが分かったうえで行われることになるのでより一層、異性に対する嫌悪感が生まれたり、逆に性のアイデンティティーの喪失により LGB になることがある。また、幼児期や学童期に何らかの問題があった上にこの時期の異性の裏切りや否定は異性への嫌悪感や性的な拒絶感につながり、同性に向かってしまうことがある。

(4) LGB の同性からの誘い

自身が恋愛等の失敗で、愛における喪失感があった時に、親しい友人から LGB だとカミングアウトを受け、告白され、それを受けいれるというケースも考えられる。

(5) LGBT の情報や写真を友達や雑誌等から入手する

この時期は、性に関心が深く、大人の隠しているものをこっそり探して見ていたり、友人が入手したものを見せ合ったりする傾向がある。そういったところから刺激を受けてしまうことがある。

(6) 同性にひかれる情や性的要求が出始める

幼児期、学童期に性的アイデンティティーが変わる出来事があった場合、具体的に同性に対する性的欲求として現れる場合もあり、感情が高ぶる時期なので同性の先輩等に夢中になる場合もあると言われていいる。そういう時に LGBT の情報が入ると同性愛に向かう場合がある。

LGBT の原因	
思 春 期	① 性的違和感の解釈を性同一性障害、という情報を得る ② 部活動等の人間関係の中でのプレッシャーや違和感 ③ 同性間、異性間の性的トラブル ④ LGB の同性からの誘い ⑤ LGBT の情報や写真を友達や雑誌等から入手する ⑥ 同性にひかれる情が出始める

LGBT の問題が性的な成長によって具体化する時期

※LGBT の克服の条件

基本的には、第 2 節と変わらないが、この時期は問題が具体的に発覚してくる時期である。この時期は浮つきやすい心はあるもののそれを行き過ぎないように抑える必要がある時期と言える。同性に感じる興味関心は、幼児期に同性の親の愛の不足を感じている場合が多いが、思春期の性的な感覚は学童期や幼児期とは比べ物にならず、その愛の不足を性的に求めてしまう場合がある。

性的な感覚の自覚はより強くなり、もし過ちを犯せば、より心情の傷は大きくなる。しかし、子供が望まずに得た痛みは、父母である神様も同様なのである。同性に愛を求めずに神様の愛を求めることが心情の傷の修復の最良の手段である。そして、ボランティア活動など、より健全な意識を持った人と共に人助けをするなどしながら、人間関係を築きなおすなども心の傷を癒す方法となると考えられる。もちろん、無理をするのではなく、すべてを知って受け入れられる集団の中であることが望ましい。

思春期は、早熟の子は、女の子は 10 歳くらいから、男の子は 12 歳くらいから、体が性的に大人らしい変化が出てきて、成熟の遅い場合、女の子は 17 歳、男の子は 19 歳くらいで、やっと大人らしくなる。その差は最大 7 年もあると言われている。(劣等感からの解放 ジェームズ・c・ドブゾン著 P.195) この双方が、平均的な成長との違いから、からかわれたり劣等感を持ったりして問題を抱えている場合があるが、性的な成長途上は将来の幸福には関係ないので、一見普通の子でも誰もが多少なりともある悩みがあるという事実を知ってほしい。それが原因で自分に与えられた性を嫌っているとすれば筋違いである。

もし、何かが原因で自分の性や異性を嫌悪しているならば、逆に下記の内容のような聖書の理想的男性像と理想的女性像を思いうかべ、自身の躓きを及ぼした男性や女性はただ過ちを犯していただけだということを気づけば許せるのではなかろうか。また、無理する必要はないが、下記は聖書の理想的男性像、女性像の聖句をあげたものである。もし、受け入れる内容があれば、実践することで違った視点が得られると思われる。

「性同一性障害 Q&A クリスチャンとして考える Q38」

「男らしい」「女らしい」とはどういうことか？より引用

a 女性の役割

・はでな身なりでなく、控えめに慎み深く身を飾る (第二テモテ 2 章 9)。

- ・結婚したら、夫と子どもを愛し家事に励む（テトス 2 章 4～5、第一テサロニケ 2 章 7）。
- ・夫を敬い、その保護を受け、指導に従う。（創世記 2 章 18、第一コリント 11 章 9、エペソ 5 章 21～24、第 1 ヘテロ 3 章 1～6）
- ・家の内と外とを問わず、夫と協力して社会に役立ち、子どもと夫に喜ばれ自分も満足のいく仕事をす。 （箴言 31 章 10～31）

b 男性の役割

- ・自分を犠牲にして妻と子どもを守る（エペソ 5 章 25～29、第 1 ヘテロ 3 章 7）。
- ・家族に愛情を表現する（第 1 テサロニケ 2 章 7、ルカ 15 章 20）
- ・教育や経済の必要を満たす（第二テモテ 3 章 4～5、エペソ 6 章 4）
- ・強くて男らしい人は、暴力をふるわず（第二テモテ 3 章 3）、
- ・感情をコントロールし（同上 2 章 8）、
- ・理性を十分に生かし（ヨブ 38 章 3、40 章 7 「勇士のように」は「男らしく」とも訳せる。イザヤ 46 章 8 「しっかりせよ」は「男らしくあれ」とも訳せる。）、
- ・信仰に堅く立ち（第一コリント 16 章 13）、
- ・リーダーの責任を負う（ヨシュア記 1 章 6～7、第一列王 2 章 2）。

「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」（コリント人への第一の手紙 10:13）

男らしさ、女らしさが嫌で否定したのに聖書で学ぶというのは、逆説的に感じるであろう。しかし、聖書は家庭の中での男女の役割を説いているのであって、それ以外の個性を完全に否定しているのではない。自分の個性の中で家庭的な男らしい、女らしい内容を身に着けることは幸福を得る上で大切なことであると考えられる。

第 4 節 青年期（18 歳から 24 歳）の問題：専門的学習や就職して働き始め社会での自分の役割を意識し、結婚を考え始める時期

この時期は、自分の人生の道を歩み始める時期である。それゆえにそれまでに歩んで形成された心情的土台や能力が試される時期でもある。LGBT のアイデンティティーの発達における最後の段階は、たいいてい高校卒業後の十年間、すなわちあらゆる種類の選択肢が私たちの目の前に広がっている時期となる。この時期になって、中には、はじめて LGBT を意識する人もいる。

それは、自分というものを見つめて、自分とは何かを問わなければならない時期なので、LGBT のことを知っているとその生き方も選択肢の中に入ってくるからである。自分の人生の方向づけとアイデンティティーの探求のために、あらゆるものを試しだす時期である。

若者にとって、大学に行くことや仕事社会に入ることは、さまざまな自己表現の可能性へとつながっていく。いままで何も問題がなくてもこの時期に LGB の誘いを受ける場合もあり、LGBT としてのアイデ

ンティティをすでに持った人は、今まで具体的な行動までしていなくても、この時期から始める場合がある。

(1) 男性や女性の理想像価値観の違いにより異性と接するのに疲れてしまう

最近では、キャリアウーマンが多く、働く女性は男性よりも仕事という女性もいる。そのような中で女性に否定された男性がゲイになる場合がある。また、男性に物足りなさや競争相手だと思える女性がレズになる場合がある。

(2) 社会的なジェンダーの役割の仕事に合わない

学生時代は男女の差をさほど意識しなかったものの、実際に仕事を始めると男性として求められる仕事内容や女性として求められる仕事内容に合わないと感じ、自分はトランスジェンダーだったと思うことがある。もちろん、それまでの人生でも何らかの問題がある場合がある。しかし、それをそう解釈せざるを得ない仕事環境のストレス問題、パワハラや様々な問題がある場合がある。

(3) 自分が本当にLGBか確かめるために行動し、確信する

すでに、LGBのアイデンティティを持ち始めていた男女はこの時期に確かめるための行動を起こす場合がある。

(4) 強姦・性的虐待

どの年齢であってもこの問題は性的アイデンティティに影響を及ぼす問題とされている。

父からの近親相姦を受けたバーバラの実話を引用する。

「大学に入って、私は何人かの男性とデートしてみました。けれども男性と一緒にいると、父親にまつわる恥辱や嫌悪感をどうしても思い出してしまうのです。私は、母のように有能で積極的な女性の友だちに惹かれてしまっている自分に気がきました。けれども私が求めていたのは、母と違って、私に同情や注目を与え、精神的な支えとなってくれる女性だったのです。」

(「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM出版 P.109)

このとき、バーバラは、はじめて同性愛の行為をするようになったのである。

性的虐待を体験したジャニン・フルズという女性の実話

以前ロサンゼルスでデザートストリームミニストリーズという団体のグループリーダーを務めていて、現在は病院でソーシャルワーカーとして働いているジャニン・フルズは、幼少時から、年上の少年たちや大人の男性たちによって数回にわたる虐待を受けてきました。ジャニンは、内側に秘めていた恐れにも関わらず、高校時代にはデートをし始めるようになりました。けれども、そういった異性愛的な関係がもたらしたものは、より多くの心の傷と痛みだけのように思えたのです。彼女は、ある晩の出来事を特に覚えています。

「私はデートでダンスに行く予定でした。それはすごくリッチなもので、客船に乗ってサンフランシスコ湾を巡るという特別の夕べでした。

私はそのためにドレスを新調していたほどでした。それなのに、土壇場になってデートの相手がキャンセルの電話を入れてきたのです。あまりに傷ついた私は、完全に感情を押し殺すようになりました。

「金輪際、男の人になんか、心を許したり、デートしたりするもんか」と私は決心したのです。」これはジャニンが同性愛の関係へと傾いていくのに、また一歩近づかせる経験となりました。やがて彼女は完全に男性を見限り、ますますレズビアンの関係に陥りやすい状態に入っていました。

(「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM 出版 P. 106～107)

LGBT の原因	
青年期	① 男性や女性の理想像価値観の違いにより異性と接するのに疲れてしまう ② 社会的なジェンダーの役割の仕事に合わない ③ 自分が本当にLGB か確かめるために行動し、確信する ④ 強姦、性的虐待

(この時期は、大人となって自分の意志で歩み出す時期であるがゆえに、その時につまずくと何かのLGBT等の価値観に自分をゆだねてしまう場合がある。)

※LGBTの克服の条件

ここで、すでに、LGBを確信している人は、過去にすでに問題は起きているが、ここで具体的な行動をはじめとろうとする人は、実体的な関係を持ってしまうのとポルノ雑誌等で想像するのとでは、関係性の深さが違うとは言える。人間関係を持ってしまうとそこから抜け出るのは容易なことではない。ただ、雑誌等の問題はより簡単に手に入りやすいということであり、自己管理が必要になるものである。何が自分をそうし向けるのか過去に戻って問い直し、認め直すのがよい。

ここでは、社会に出て、LGBTを疑う人に対して、検討してもらいたいことを書く。

それまで、女性的な行為とされる家庭で行っている料理や炊事、洗濯、お茶を出したりする接待など、やったこともなく、おおらかに育った女性や、あまり、積極的なリーダーシップなどを取ったこともなく、部屋にこもっていたような男性は、社会で求められる女性像、男性像に違和感を抱き、ここで自分の性的アイデンティティーを否定されたような気になる場合がある。

しかし、それを理由として男性なのに女性だと思ったり、女性なのに男性じゃないかと思ったりするのは、自分に発達されてこなかった能力の分野に戸惑いを感じていることが多いのである。それで、トランスジェンダー等を考えたとしても、解決されるだろうか？それが、原因なのでなく、他人からのプレッシャーや満たされていない人間関係の問題の方が解決したい問題なのではないだろうか。

一般的な女性の仕事が出来ない女性らしい人はいくらでもいるし、男性らしいと言われる仕事が出来

なくても特化した仕事ができる男性はいくらでもいる。慣れていないことをやると誰でも他と比較して後れを取っていることにストレスを感じる。それによって鬱になったりすることもある。そして、頭痛や体調不良にもなる。それは、トランスジェンダーを考えるよりも、社会的ストレスにどう対応し、自分に合う仕事をどうやって見つけていくかを考えることが必要であり、鬱病に対する医学的支援を受けるほうが妥当である場合が多いと思われる。

オーストラリアで性適合手術を受けたアラン・フランチさんは、その後、後悔をして 8 年後に精神科の治療を受け、性同一性障害は「鬱であり、精神錯乱している」と自分の過去を後悔してサポートグループを作って訴え、「必要なのは生殖器を取り除くことでなく、抗鬱剤と精神治療である」と訴えている。

(性同一性障害 Q&A &30 参考)

もし、個性がその職場に合わなかったことが問題であるならば、その個性を生かす職場はあるはずである。それを見つけるのが大切だと思う。確かにパワハラがあったり、問題があったりしたストレスの高い職場が多かったのかもしれない。でも、社会性を身に着ける準備が足らなかったことや心構えがなかったからかもしれないのである。だれしも、合わない職場環境はあるのである。そのストレスが本当に LGBT によるものなのか、コミュニケーション不足によるものなのか、あるいは、もっと自分自身を見つめなおす必要があるのかもしれない。自分の性的アイデンティティーを疑うよりも自分が何を本当にしたいのかすべきだと思うのが大切と思う。

第 5 節 環境問題

(1) ポルノ、雑誌、映画・ビデオ等での LGBT の肯定による影響

ポルノや雑誌は視覚から影響を与える要素が大きく特に男性は視覚からの影響に弱い傾向がある。映画・ビデオ等は、それに加えて、肉声まで再現され、音響効果まであるのでより影響力が強くなる。特に、映像はより情が伝わってくるのでその世界観に巻き込まれてしまう可能性がある。

(2) インターネットなどの LGBT 関連の情報・映像の氾濫による影響

インターネットは、本来ならば法律にすら反するようなものですら氾濫している。また、一度流布してしまえばコピーされれば削除できないので、非常に難しい問題となる。インターネットは、氾濫した情報と共に個人的な交流と思って性的な画像や映像を安易に流すのは非常に危険な行為である。

(3) LGBT 思想の広まりによる影響

LGBT 思想の影響は性的マイノリティーを性的マジョリティーに変えてしまう影響力がある。それは、それ自体が異性愛のアイデンティティーの混乱のもとになるからである。このような環境は、しっかりとした思想をもって改善していかなければならない。

※LGBT の克服の条件

環境問題は、どの年代でも大きな影響力を持ち、逆に環境がなければ、様々な影響があってもそれが実際の行動にならずに済む場合が多い。自分で持っているものの処分は当然のこととして、そのような雑誌等が目につかないような場所を選んで、例えばコンビニでなくスーパーまで足を延ばして、買うとか、そのような環境が明らかにある場所は選ばない。しかし、誘惑はあるものなので、そのような思いをどうやって切り替えるか、対策を打っていく必要があるし、信頼できる相談相手がいれば、良い力となると思う。

以上、成長期間での LGBT の要因となり得るものをあげた。原因となるものは一つではなく、さまざまな要因が組み合わさって原因となり得るのである。それゆえ、LGB と言っても T と言っても一つのパターンではなく、様々なタイプが存在する。それゆえ、女性が男性が嫌いでレズになるわけではないと言われることもあるが、実際にそのようなことも要因の一つになっている場合は存在する。

LGBT と一括りにするのは必ずしも適当ではないが性的なアイデンティティーに関わると言う点においては共通性があると言える。その要因のウエイトや関連によって LGBT のどれかの原因となり得るということである。次のページに一覧表とした。

成長期の LGBT の原因一覧表

[目次に戻る](#)

	LGBT の原因
幼 児 期	<ul style="list-style-type: none"> ① 親が支配的、無関心、何らかの中毒症 ② 親の夫婦関係の問題や片親の不在 ③ 親の教育方法・教育指針 ④ 親に性的なアイデンティティーを否定的に見られる ⑤ 母親が妊娠中に受けたストレスなど ⑥ 性的虐待の経験 ⑦ 保育園や幼稚園での疑似異性的な体験 ⑧ 興味本位の自慰行為
学 童 期	<ul style="list-style-type: none"> ① 学校教育で LGB を肯定する内容を教えられる ② 異性に否定されたり暴力を振るわれたりする ③ 同性間の性的いたずらや異性からの性的虐待を受ける ④ その他の性的虐待 ⑤ 親や周りの大人たちから逆の性だったら良かったのというようなことを言われる ⑥ 友達からのプレッシャー
思 春 期	<ul style="list-style-type: none"> ① 性的違和感の解釈を性同一性障害、という情報を得る ② 部活動等の中でのプレッシャーや違和感 ③ 同性間、異性間の性的トラブル（性的虐待も含む） ④ LGB の同性からの誘い ⑤ LGBT の情報や写真を友達や雑誌等から入手する ⑥ 同性にひかれる情や性的欲求が出る
青 年 期	<ul style="list-style-type: none"> ① 男性や女性の理想像価値観の違いにより異性と接するのに疲れてしまう ② 社会的なジェンダーの役割の仕事に合わない ③ 自分が本当に LGB か確かめるために行動し、確信する ④ 強姦・性的虐待
環 境 問 題	<ul style="list-style-type: none"> ① ポルノ、雑誌、映画等での LGBT の肯定による影響 ② インターネットなどの LGBT 関連の情報・映像の氾濫による影響 ③ LGBT 思想の広まりによる影響（性解放運動、女性解放運動なども含む）

成長期間における人間関係と環境からくる原因をあげたが、同性の親に対する愛の枯渇や本来の性に対する性的アイデンティティーの否定によって、本来の性に対する性的感性の成長を止めてしまい、成熟できずに成長が止まった状態となって人格的な基礎になってしまい、LGB 等の同性愛のみならず、いじめ、うつ病、虐待等、様々な問題を引き寄せてしまうことが多いことがわかっている。特に性的虐待はどの年代でも性的アイデンティティーの大きな傷となり LGBT の原因の最有力候補と言われている。

第1節 人間の墮落と四大心情圏の喪失

どんな立場の人であってもできるならば幸福になりたいと願っている。幸福の源泉は愛であり、永遠・不変・絶対的な愛を得ることが人間の本心の望みである。

人間は誰しも衣食住性という肉体的な欲望を持っている。それと同時により精神的な満足は、他に役立ち調和する中で社会に貢献し、善なる生活をする中で永遠に愛し愛されるようなパートナーによって良き家庭を築いてこそ得られると感じている。しかし、良き生活をして真の愛を得ようとしても自分の肉体的欲望を優先して、時に不義を犯してしまい良心の呵責を感じる生活の中で何が善で悪なのかわからなくなってしまうのが人間の状態であると言える。それゆえ、聖書では「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもうひとつの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。」(ローマ人への手紙 7 ; 22~23) と書かれているのである。

このように心身の欲望が矛盾し、葛藤しているのが人間の姿であり、とりわけ愛と性の問題はいまだに社会問題とされ未解決な問題となっている。本来矛盾する存在は成立しないことから人類は後天的にそのようになったと見なければならず、このような状態をキリスト教では人間の墮落と称するのである。統一原理では人類始祖が愛の関係で過ちを犯し、真の父母である立場を失い、神を見失い、悪魔を霊的な父とするようになってしまった (ヨハネ 8:44) ために、神の祝福である三大祝福も四大心情圏の完成が未成熟な状態になったために様々な愛の問題による不幸が生じるようになったと見るが、そのようにして四大心情圏を失ったことがどのように LGBT に影響しているのかを統一思想の観点から論じることとする。

第2節 四大心情圏の完成と墮落による喪失

三大祝福は、四大心情圏の完成によってなされる。それでは、四大心情圏は、どのような状態で完成されるものなのだろうか、文鮮明先生のみ言葉を引用する。

本来、神様の真の愛の生命、真の血統によって連結された真の家庭の中で、祖父母、父母、子女を中心として、三代の純潔な血統を立て、父母の心情、夫婦の心情、子女の心情、兄弟姉妹の心情を完成するとき、これを総称して四大心情圏の完成というのです。(「平和経」 P. 190)

四大心情圏の完成は愛の完成であり、神の三大祝福の完成をまさしく意味すると言える。このような観点から見れば、墮落の結果によって、四大心情圏を喪失したということは、すなわち神の三大祝福を失い人間にとって神が与えようとした本質的なすべての内容を失ったことを意味するのである。

四大心情の完成 ⇒ 三大祝福の完成 = 神の創造目的の完成
四大心情の喪失 ⇒ 三大祝福の崩壊 = 本質的な内容の全てを失う

それでは、第3節以下は各心情圏の内容別に論じることとする。

第3節 子女の心情圏と LGBT

子女の心情圏とは、親孝行の心情のことであるが、文鮮明先生のみ言葉を引用する。

(子女の心情とは) 父母が直接教えてくれるものではなく、学校で習うものでもありません。子女のために献身的な生活をしている真の愛で暮らす父母の姿を見て体恤して悟るのが子女の心情です。(「平和経」P. 1540)

墮落によって、子女の心情圏を喪失したことは、本来の自身のアイデンティティーの喪失を意味するがゆえに、真の自分とは何かわがわからない、となったことを意味する。

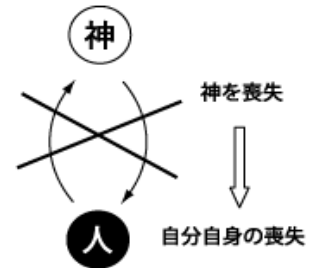
統一思想から見れば、人間の本質は 神の子であり、

(神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。(創世記1:27))

「神的価値」を持つ人間であり、男と女とは神の神性に由来する。それゆえ、神がわからなくなったことは、靈的な親を失ったことを意味し、靈的な私生児となったのである。

それゆえ、本来のアイデンティティーを失い、人生の根本問題に直面するようになったのである。

人生の目的、人間の価値がわからず、本来神性である性的なアイデンティティーを喪失し、その結果、LGBTのアイデンティティーを持たざるを得えないような状況も生じ、愛の矛盾を感じ、命の尊さもわからなくなり、ついには自殺さえも選ぶことがある不幸の原因を生んだのである。



神を喪失したことを正当化する理論
(ex) 理神論
神の死の哲学、
無神論、進化論

第4節 兄弟姉妹の心情圏と LGBT

兄弟姉妹の心情圏の文鮮明先生のみ言葉を引用する。

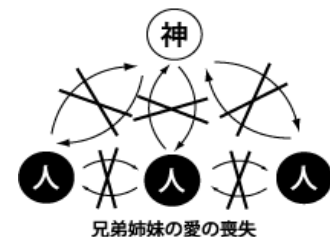
兄は弟に対して、あたかも父母が子女を愛する心情で面倒を見てために生きる生活であり、弟は兄や姉に対して、父や母に仕えて侍る真の愛の実践です。互いに足りない点を補い合い、良い点は育て、学び合う真の兄弟愛が完成するのです。誰も引き離すことのできない血を分けた兄弟姉妹間の愛であり、心情圏です。(平和経 p. 1541)

共通の靈的な親である神を失い、アダムとエバが墮落したことにより、実体の真の父母を喪失したことは、すなわち親から受ける真の愛の喪失であり、そのことは、兄弟姉妹の関係の中心軸を喪失したことを意味する。そのことにより、自己の性的アイデンティティーが混乱した上に

その失った親の愛を兄弟姉妹や他人から受けたいという衝動が生じた。

兄弟姉妹の愛が混乱し、延長上にある友情と性愛の関係が混乱し、

LGBの恋愛関係が生じることになったのである。



第5節 夫婦の心情圏と LGBT

夫婦の心情圏の文鮮明先生のみ言葉を引用する。

夫婦は、四大心情圏を中心として見るとき、お互いが自分を完成させてくれた絶対的な相対者なのです。ですから、夫は、妻に理想的の神様（天）の息子を迎えさせる立場であり、天の兄を迎えさせる立場であり、天の夫を迎えさせる立場であり、天の父を迎えさせる立場です。妻も、夫にとってこれと同じ位置に立つのです。（天一国経典「天聖經」 p. 1346）

夫婦の愛の特異性は、相対のみを永遠に愛し、愛されたいという他の侵犯を許さない限定性を持った愛であり、決して多方向に分かれることを望まぬ愛である。神の第二祝福でもすでに解説したが永遠・唯一・絶対の人間の本心の要求を満たすのは、一夫一婦制のみである。永遠に唯一自分だけを愛する相手がほしいと思うのが本心である。愛と性の本来の在り方や価値を見失うことにより、不倫や離婚、近親相姦の問題が生じたのである。不倫や離婚は、子供の心情を切り裂くのと同様の行為であり、片親の不在は性的アイデンティティーにも関わり、近親相姦は異性への信頼を喪失させ、LGBT の原因となることはすでに述べた。そして愛から生命を生み出す神聖な器官である性を道具として人間を物のように売る売春が生じ、性の魅力を同様に売り物とするポルノがあるような問題も間接的に LGBT と関わっている。そして、同性婚は愛と性と生命の関係を切り離し、四大心情圏を崩壊させ、それが神の創造目的と祝福から人間を遠ざけてしまうのである。

(1) 不倫

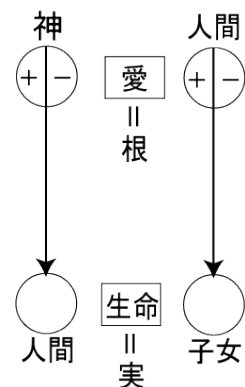
家庭破壊の根本原因であり、子女の心情を二つに裂く行為⇒男の子のトランスジェンダーには父親不在が多い。

(2) 売春

金銭 は万物の象徴 ⇒ 万物を売買するのは罪ではない
人間は万物ではない ⇒ 奴隷制度は大きな罪
愛は生命の根っこ ⇒ 愛を売買するのはより大きな罪
・・・愛と性の本来の価値と人間の尊厳性の否定による傷物にする

(3) ポルノ

性を公衆の面前にさらす罪
愛と生命は根と実の関係 ⇒ 根は隠れている
宇宙の生命の背後に隠された性相と形状、陽性と陰性の神の二性性相
子女の生命の背後に隠れた 夫婦の愛
夫婦愛は外に出すものではない
尊いものは、大切に保管・・・人間の 尊厳性 の中心である性を自己中心的欲望のはけ口にする



(4) 近親相姦

人間の精神性の根本的破壊

(5) 同性婚

本来の男女関係の夫婦の関係、愛と生命の性の関係の崩壊⇒少子化、命の尊さの喪失
性病、エイズ蔓延の引き金⇒人類滅亡の危機

第6節 父母の心情圏と LGBT

父母の心情圏の文鮮明先生のみ言葉を引用する。

結婚するその時間に、子女の愛と兄弟の愛と夫婦の愛、三つの愛が結実します。この三つの愛の基盤の上に父母が立つのです。(天一国経典「天聖經」P.1346)

父母は子女を生み、実体の神様の立場で、天の子女として養育しなければなりません。そのようにすることで、無形の神様がアダムとエバを教育した、その真の父母の心情圏を体験して相続できるのです。見えない神様の創造の役事を、自分たち夫婦を中心として、息子、娘を養育しながら体験するのです。神様の代わりに第二の創造主となる栄光を受けるようになるというのです。(平和経 P.1543)

父母の心情圏は四大心情圏の根本であり、結実でもある。そのような観点から、人類始祖の墮落は、結局、すべての愛の問題を引き起こす根本原因となった。

人類始祖の墮落 ⇒ 真の父母の愛の喪失 ⇒ 未成熟な親 ⇒ 四大心情圏と三大祝福の崩壊
⇒ その墮落の過程から起こった未成熟な愛による墮落の性質は、人間の本性のようになってしまった。
これを、統一原理では墮落性本性という。

なお、墮落の詳細な過程については原理講論の墮落論を参照されることを望む。

<http://ffwpu.family/library/divineprinciple/fall> (原理講論 墮落論 FFWPU.Family)

<https://www.youtube.com/watch?v=Gw41WpdhHec> (勅使河原氏による墮落論の講義)

第7章 墮落性本性から見た LGBT の原因

[目次に戻る](#)

統一原理では、人間始祖が、愛と性の問題で墮落し、その原罪から人間が罪を繰り返す原因となる性質が生じたと説く。それはある意味、人間が当たり前のように持っている性質と思われているので墮落性本性と言っている。それは、大きく分けると四つの内容だが、LGBT の原因になりそうな内容を中心に解説する。墮落性本性の具体的な内容は「新墮落性の構造 光言社」の一覧表 (P.23) から引用した。

(1) 神の立場に立てない。(神のように正しく無条件に愛せない)

- ① 自己中心（正しい親の立場で愛することができない）
- ② 猜疑、ねたみ、嫉妬、憎しみ、派閥
- ③ 相手の喜びを祝福できない
- ④ 視野が狭い

親であっても自己中心的に子供を見てしまうことや感情に任せて、幼児期に子供の性やその個性を生かせずに否定してしまうことがある。本来は、その個性に合った形で「男らしいね。女の子らしいね」とほめて育てるのが理想であることはすでに論じた。

ジェンダーフリー教育でジェンダーが否定されることを納得させられてしまう背景には、親や周辺の人々が性的なアイデンティティーを否定して傷ついた子供の心情的背景がすでにあるからである。そのような子供がどうなっていくかは、成長過程の幼児期の内容においてすでに詳細に論じた。このように LGBT の傾向をもった子供にとって、ジェンダーがプレッシャーになっていることは事実であるが、男女のあるべき理想を教えることが間違っているわけではなく、それによって、個性を否定してしまうことが間違っていたのである。そして、性的虐待をされたり、支配的な教育や無関心をよそわれたりした子供が、本来の性的アイデンティティーを持っていないのは当然である。

また、親ですらこのようなことがあるわけだから、教師でも当然このようなことが起こり、教えられた子供は自分の性的なアイデンティティーに疑問を抱くことがある。しかし、これは、男女の在り方の理想そのものを教えることが必ずしも問題があるからではなく、それぞれの個性を生かした形で男女の在り方の大切さも教える必要がある。子供のころは、個性を伸ばしながら、大切な男女の違いをいかにして教えるかが重要なのである。

子供の世界では、何か欠点のある子を集団でからかったり、また、逆にいじめられっ子同士が慰めを得るために徒党を組んだりすることがあり、それが問題となることがある。嫉妬ゆえに自分と同じような立場にしたいと思ったり、愛されているものから愛を受けたいと思ったりして、自分も愛されている気持ちになりたいと思ひ誘惑することがある。その結果、相手も自分も不幸になってしまう。このように自分の満たされたい気持ちを間違った方向性で満たそうとする自己中心性が LGBT の問題を引き起こし、心情の歪みを起こしてしまうことがある。

このような問題を通過して既に性的アイデンティティーに問題が起きたものをどうしたらよいのだろうか。それは、なぜ自分が肉体において男女どちらかであるのかというそこに帰らなければならないのである。親が完全に男女を生み分けられるか？そうではない。聖書には「あなたは、わたしの内臓を造り、母の胎内にわたしを組み立ててくださった。」（詩編 139 : 13）「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。」（エレミヤ 1 : 5）とあるように絶対者である神が男女にしたのである。その根本に帰って自分を見つめなおすところから始めることが、重要であり、神が創造された立場に帰ることこそ、自分の本当の性と生命のアイデンティティーを見出すことになるのである。

また、同性愛の女性の傾向として嫉妬心、所有欲、独占欲が非常に強い傾向があるようである。なぜ、そのような感情が強いのか、その根底は同性の母親の愛に不満があったというケースを成長過程であげたが、親であれば本来は無条件に愛してくれるが、他人は、気が合うからとか、自分に都合が良いからといって愛することが多い。また、他人が愛されているように見えても、それは自分の思い込みである場合もあり、嫉妬によってマイナス思考になることは意味のないことである。もし、神様が皆の幸福を願い自分の幸福を願っているとするなら、どうすべきか、どのように生きるべきかを前向きに考えて行動することが解決の道であろう。

(2) 自分の位置を離れる

- ① 自分がやるべきことをやらない
- ② 公私（全体と個）の区別がつかない
- ③ 欲求不満
- ④ 過大な欲望

親が、立場を離れて離婚する、浮気すること。さらに問題なのは、自分の子供に性的虐待を加えること。これは自己の位置を離れる典型だと言える。親が自己の位置を離れば、子供は自分の出生の意味を感じることが出来ず、自身の存在価値を感じる事ができない。それが、性に関わることなら、当然、LGBTの原因となるのである。

また、寂しさを感じたり、欲求不満を感じたりすると、欲求を満たそうとするために本来の方法でない方法でそれを満たしてみたいという方向になりやすくなる。そのために、寂しさ、欲求不満などの心情になっているときこそ、正しい方向で情を満たす方法が何かを知る必要があるのである。その正しい方向にするためには、当然、ポルノとかそういう雑誌は処分しなければならない。それで、部屋を片付けたり、健全な音楽を聴いたり、LGB以外の友達と会ったり、徳を高めるような本を読んだり、映画を見たり、計画を立てたり、スポーツを試してみたりすることで情を満たしていくようにすることである。

また、最近のジェンダーフリー教育は、本来の男女の位置をなくしてしまおうというものだが、深層心理学者林道義氏は「子供は三歳くらいから始まって思春期までには、自分が男または女の特性を持っていることを意識的に確信し、それなりの行動基準が確立されていなければならない。さもないと、価値観や考え方の面で自分に自信が持てず、無気力や閉じこもりの原因になりかねない。さらに、異性との関係がうまく作れないとか、・・・同性愛に傾くとか、要するに生物として子孫を残すために必要な行動に支障が出るおそれがある。」（「ジェンダーフリーの害毒」のタイトルで『産経新聞』平成14年5月6日付の教育面）と言う。つまり男女の位置を離れることが良いことだという思想が特に、女性解放論者（フェミニスト）によってなされているが、人間から本来の愛や家庭を奪って女性が解放されるのではなく、真の愛の実現によって女性は解放されるのである。

(3) 主管性の転倒（主客転倒）

- ① 従うべきことに従えない
- ② 人の話（意見）が聞けない
- ③ 素直になれない
- ④ 驕慢、強情
- ⑤ 目的と手段が不明確

女性解放論者のレズノ行為で男子の上位に立とうというのは、まさに主管性を転倒させようとする行為である。彼女らは性の在り方を変えてまで女性の権利を得ようとしたが、それぞれがふさわしい立場で役割を果たせばよいのであって、責任の役割に違いがあっても愛し愛される立場に上下の差はないのである。たしかに、今まで男性は多くの過ちを犯してきた。それゆえ、文鮮明先生が「私か語る純潔とは、一時期、女性だけに強調されていた封建的な純潔のことではありません。神様の大原則から見た、男女共通の純潔のことをいうのです。」と語られたように、これから必要なのは男女共通の純潔であり、そのうえで、男女が各々の役割を自覚したうえで、双方の意見を聞きながら、豊かな社会を作ることである。

また、心情の土台が歪んでしまうと、正しいことでも聞けなくなってしまう。そんな思いになり、何もかも逆のことを行いたくなる。これは、心情の土台が歪んでしまったのは本人のせいではないこともあるが、そのような状態の自分の心の状態に、成長過程を振り返り、気づくことも大切である。

(4) 罪の繁殖（責任転嫁）

- ① 被害者意識をもつ
- ② 面子にこだわる
- ③ うそをつく
- ④ 隠す

自分に問題があると、他の人もその中に引っ張って安心しようとする。ポルノ雑誌を見合ったり、発展すると乱交パーティーを行ったりというようなことになる。これは、慰め合っているようで傷を深く大きくしている。そのようなことをせず、いかに、自分の問題と向き合いそれを（2）で論じた内容のように善に置き換えていくかということが必要である。虐待やいじめにあったのをこのように慰め合って、自分自身が強く生きようとすることから逃げてしまい、すべていじめたほうが悪いからしょうがないと傷を広げ合ってしまうことがある。だが、いじめるほうも徒党を組み共感を持ちながら他人の欠点を見ていじめることによって、自分の満たされない部分を満たそうとしているだけで、ともに満たされない立場で責任を放棄してしまっただけで傷をなめ合っているような状態なのである。

以上、四つの墮落性本性をあげたが、この墮落性本性が四大心情圏の形成を歪ませ、それが性的なアイデンティティーに関わると LGBT 問題を引き起こす可能性が高いと考えられるのである。

LGBT に対して克服したいと真剣に葛藤している人もいと聞く。その参考の一助になればと思う。

LGBT は愛と性の問題であるがゆえに、それを克服するのは、容易なことではない。自分が何によって存在したかという根本に帰ろうと、絶対者である創造主の愛を信じてこそ、この難しい問題を克服することが可能になる。

第1節 カウンセリングとの違い

同性愛者への克服のためのカウンセリングは、最近否定されているが、克服の一助としてのカウンセリングそのものは有効であると考えられる。しかし、統一思想的な観点からは、カウンセリングだけでは、根本的解決は難しいと言える。カウンセリングは一般には個人に助言して方向性を与えることにより、個人が問題を乗り越えやすい能力を引き出すことであると言える。しかし、統一思想では、確かにカウンセリングは必要であるが、四大心情圏の形成に問題があったのであるから、それらの関係を築くために他者の総合的な協力がある環境も必要だと考えるのである。もちろん、優秀なカウンセラーは親兄弟などにも協力を求めることもあるとは思われるが、人間の情を変えるのはそのような健全な人間関係を作れる場をいかにつくるかが大切なのである。キリスト教系の同性愛克服団体では克服のための合宿等を行って団体生活をさせることがあるというが、それを定期的に行うのも人間関係を築き、本来の情を取り戻す方法として有効な手段だと思われる。ただし、それを実践するにはかなりの調査は必要と思われる。克服には、本人だけでなく、父母の立場や兄弟姉妹、友人の立場に立つような人間関係が必要である。

第2節 克服順序

個人の内容が中心になるが、克服順序の例をあげる。

(1) 絶対者たる神様の愛を信じること。

信仰を持たない人には難しいことかもしれないが、創造主たる父母なる神様に帰らなければ、根本的問題は解決しない。これは非常に大切なことである。神への信仰を持つことは LGBT を克服しようとする最大の助けとなる。神の助けや導きが克服にとって一番必要なものであり、人間の力だけでは難しいのである。

(2) 神の創造した男女のアイデンティティーを受け入れること。

(3) 成長過程を振りかえる。

自分の内面の見つめ方に欠けたところがなかったか、LGBT の考えに頼って、自身の何らかの劣等感を肯定しようとしたようなことはなかったか？

どこで、性的アイデンティティーに疑問を感じたか？

なにか普通と違うと思いだめたきっかけは？傷ついたことなどはないか？

当たり前を受け入れられると思っていたことを否定されたことはなかったか？

どこで、LGBTの生き方をしようと思ったか？

(4) 成長過程で LGBT に関わる情的なきっかけに墮落性本性に当たる何かがかかわってないか？

親、親戚、友人、知人、あるいは自分自身においてそれらの問題は整理していく必要がある。

(5) LGBT のライフスタイルと関わる者（物）から別れる

LGBT はライフスタイルになってしまっている。雑誌、衣服等を処分することは当然だが、人間関係の分別が必要である。LGB の人は、同性の恋人に対して、別れた場合、喪失感、寂しさ、など感情的なアップダウンが必ず起こる。同じように同性愛を分別する気持ちがある相手なら良いのではないかと思うかもしれないが、そのような関係を結んだ相手と共にいて心情を切り替えるのは困難なことと言える。信頼できる LGB 以外の友達に会いに行くとか、外に出て気分を変えるとか（8）の習慣ができるまでは助けを借りながら分別心をつけることが必要になる。今まで行ってきた行動を計画的に変えていく必要がある。

(6) LGBT 以外の良き相談相手、報告相手を持つこと

相談相手を持つことは自分の中で解決できない情を外に出し、LGBT とは違う発想や情とつながることによって、発想の転換が得られる。とらわれから超えやすくなる。

(7) 自分の中の誘惑を感じる時墮落性本性がかかわっていないか？

そのパターンを記録して対策する。

(8) 墮落性本性で思いがいっぱいになりそうなとき、心を満たす別の手段を探す

聖書などみ言葉を読む、克服関係の本を読む。スポーツをする、音楽を聴く、掃除をするなど。

(9) 健全な人間関係を築く

ボランティア等をしてもらわれる。奉仕的な生活の中での人間関係を築くのは同性愛的友人関係とは違う健全な関係としての刺激を受けることが可能である。

多くは癒しが必要な精神的な傷や不安が LGBT という形で表面化していることが多いので、LGBT を

克服しようとするのではなく、神様の普遍的な愛を知り、神様の愛を知った自分を支えてくれる健全な仲間関係を築いていくことによって、徐々に克服される場合が多いという報告がある。

同性愛そのものを意識して克服すると言うのは、ただ、同性愛に対する未練を大きくすることであり、ただ、分別により、寂しくなった心と本来の関係をいかに置き換えていくことができるかが重要と思われる。変われるタイミングを神にゆだねて健全な関係を大きくしていくことで、同性愛の情が相殺されていき克服に導かれていくのであり、それそのものではなくより神と人との健全な関係を築くことを目標とするのが克服の道として適していると考えられる。

(10) 一度に変わるのではないということを理解すること

一度、克服したと思っても、人生のさまざまな場面でアップダウンを当事者は経験すると思われる。同性愛者の場合、同性愛の気持ちが抑えられるようになったとしても、異性を愛することができるか、異性を健全に愛せるかは、また別次元の話である。ある意味、本来の性に対するアイデンティティーの成長が止まっていたり、別の方向に向けたことにより、異性への感性が発達不足だったりするのであり、それに加え、同性愛という経験までしているのであるから、本来の関係を取り戻すにしがたくなって変わってくるのであるが、それは傾いた天秤のような状態で本来のバランスを取り戻すには、それ相応の時間が必要になるのであることが報告されている。しかし、人によっては、信仰によって知った内容によって大きく疑問を解決し、短い時間で克服することもあるようである。それは、立場や抱えている課題によって違うので(9)に書いたように健全な関係を築くことを主眼としていくことが重要と思われる。

終わりに

[目次に戻る](#)

LGBT の原因には、科学では解明しきれていない先天的な影響や、科学では解明できない霊的な問題と言われる問題も宗教的には言われているが、今回は四大心情の形成過程に注目し、成長過程ごとに分類し分析を試みた。実際に、カウンセリングを何百件もしているキリスト教団体には通常プライベートで話されないような多くの内容が紹介されていたため、それを参考にさせていただいた。これらの内容と一卵性双生児でも必ずしも双方が同性愛者にはならないことから、同性愛者になりやすい個性は、ある程度認められるが、そのような要件ですべてがはじめから決定されているというのは少なくとも否定される内容で、男女の本質的な性差はあるものの、成長過程においては、複合的な要因でだれしも LGBT になりうる要因があると思われた。とりわけ四大心情の形成時に墮落性本性が作用すると、性的アイデンティティーに問題を起こす可能性が高いと考えられた。これは、子育てだけが問題ではなく、人間関係、環境の複合的な内容を検討するとともに表形式で整理した。

ここにおいて、とりわけ、子供に愛を与える親の愛、その夫婦関係の影響や考え方の影響は胎児、幼児に影響していて、それはある意味先天的条件と同様の影響があるという仮説を立てることが可能であると思われた。とりわけ、脳が大きく成長する期間であり、受ける情は、先に述べた石井洋氏の見解のよう

に脳の働き全体に影響し、自律神経系や性的刺激に関与すると考えられ、遺伝的な要因よりもその影響が大きいと考えられる。もちろん、それで、必ずしも決定されるのではなく、その後の要因が与える影響も大きなものがある。

しかし、このような幼児期の影響は、先天的内容と同様であり、そのようなものを克服するなどという事は不可能にも思えることではある。しかし、クリスチャンは、異性愛者であっても、利己的愛を克服しようとキリストの下で生まれ変わろうと日々努力してきた。それは、家庭連合のメンバーも同様である。しかし、それができたのはどんなに放蕩息子であっても待つてくださる神様の愛と許しを知ったからでもある。そして、家庭連合においては、人類の真の父母として歩まれてきた文鮮明・韓鶴子ご夫妻が、それを願って、命がけの人生を歩んでこられたことを知っているからである。また、同性愛を克服するクリスチャンの組織では何百名もの同性愛者が神の信仰を持つことによって克服を実感してきたと言う。

「男か女か 同性愛のカウンセリング」 p.141~142 にはこのように書かれている。

同性愛の感情は、もっと深いところにある精神的な必要性を指摘しているものなのです。・・何が彼らを同性愛に引き寄せたのかという質問をしてきました。・・・・たいてい彼らは、「他の人から注目がほしかった、誰かに認めてもらいたかった、仲間と呼べる誰かがほしかった、退屈を避けたかった、誰かほかの人との親近感がほしかった、心躍るようなことをもとめていた」などを挙げたのです。ですから、このような必要性は性的関係性以外の関係を通して満たすことができるものなのです。実際同性愛は、その根源が、精神性の必要性が満たされていないことを発端としているゆえに、・・精神的な乾きが満たされない限りは同性愛と葛藤し続けることになるでしょう。究極的に私たちの最も深い必要性は神との関係を通して満たされます。神ほど 私たちの奥深くまで及び、誰かが誰かと交わりを持ちたい、親密になりたいと言う私たちの中心的必要性を満たせる方はいません。

このようなことから、LGBTの先天性を否定しながら、克服の道を提示しないというのはあまりにも、無責任なものと感じたために力不足であるが、本論文では克服のために必要と思われる内容も論じ、また、完成したとは言えないものの、その方法論としての理論的内容を提示することに尽力した。

ここで、神の愛とはどういうものを象徴する聖句を紹介する。

ルカによる福音書 15章 11：20

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

神様は父母であり、真の愛で愛してくださっており、本当の男女のアイデンティティーは、男女が愛し合うことだと教えてくださった。このような性のアイデンティティーを信じ、同性愛を願い、行為することは幸福につながらず、不幸につながることを信じ、神を中心として結婚するまで兄弟姉妹であることを信じ、そのために純潔を守り、正しい時、正しい人、正しい条件を守っていく価値観こそが、LGBT の克服につながると考える。その中で、利己的な刺激を求めている習慣があるならば、より公的で健全な中で神様の愛を求める戦いは必要となるだろう。

しかし、祈りながら奉仕しながら神様を父母とした兄弟姉妹と共に健全に生きようとするならば「あなたがたの中にはそのような者もいました。しかし、主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています。」(コリントの信徒への手紙一 6: 11) とあるように、もし、本当に望むならばキリストの再臨であられる真の父母は、聖霊の力を与えてくださり、克服する力を与えてくださると信じるものである。今回、まだ、考察しきれていない内容も多く不足な内容であることをお詫び申し上げる。足りないものであるが、統一思想に基づく分析が克服のための一助になることを願ってやまない。さらなる、カウンセリング方法の検討、医学的研究、克服支援団体の設立などがなされることを期待する。

また、現状 LGBT の価値観を普通の価値観の一つだと受け入れる社会的な変化が見られるが、それは、問題を大きくするだけであることは論じた通りである。なぜなら、LGBT を肯定する価値観の中では、ちょっとした異性愛の躓きを同性愛に直行させてしまう。このように、この問題は、現在のただ肯定的に取り扱うマスコミや教育のままでは、マイノリティーからマジョリティーの問題へと変化し、取り返しのつかない事態になりかねないと思われる。

LGBT の後天的要因がより大きくなってしまうと、先天的要因に近い方よりも問題が大きくなる可能性がある。良く、性的な「指向」と「趣向」は違うと言われるが、LGBT の考え方が一般的になるにつれ、趣向として後天的に選択する人達も増えてきてしまうと思う。そのようなことを踏まえて偏見を持たず、彼らに接していく社会が必要であると感じる。つまり、LGBT を理解することは LGBT を肯定することだけでなく、その背景には何があるかを理解することであるという信念のもとに作成したのが本論文であったのである。

最近では、同性愛者の権利の問題で同性愛者のカップルが子供を持つことを願うことが話題になったが、今まで説明した成長過程における四大心情の発達において大きく影響を及ぼしうる可能性がある。また、同性愛者が子供を持つには、養子をもらうか、生殖補助医療、AID などで子供を作る手段となる。

AID の場合は、子供にとっても父親がわからないという問題がある。どのような方法においても人工的な方法では、父や母がいない愛でないものによってつくられたという虚無感を感じさせるのは子供の人権として問題があると言える。

ここで、揺らぐ「結婚」世界日報社の記事をあげる。

テキサス大オースティン校のマーク・レグニラス准教授が18～39歳の男女約3000人を調査したところ、同性愛者の親に育てられた人は結婚した男女の親に育てられた人に比べ、経済的、社会的、精神的問題を抱える割合が高いことが分かった。

また、例えば、レズビアン之母親に育てられた人の場合、「現在失業中」「不倫経験がある」「親や大人から性的に触られた」「意思に反してセックスを強要されたことがある」「うつ病である」「マリファナの使用」「逮捕された回数」など40項目中24項目で、結婚した男女の親に育てられた人よりネガティブな結果が出た。

ゲイの父親に育てられた人は、19項目でネガティブだった。さらに、アメリカ・カトリック大学のポール・サリンズ教授が発表した最新の研究結果によると、4～17歳の同性カップルの子供は異性の親の子供に比べ、情緒・発達面で問題を抱える割合が2倍前後高いことが判明した。

このような、結果を見るときに同性愛者のカップルが子供を育てることによって問題が起きていることは確かである。子供は大人が身勝手に扱うのではなく大人が守ってあげなければならないと思う。LGBTの人に対して、偏見を持って見ることは確かに間違いと思う。しかし、性の多様性を認めようなどという考え方は余計に不幸を増やすだけである。ニューヨーク市クレイ大学の人類文学教授チャールズ・ウニク博士は、2千の文化を研究し、そのうち五十五の文化が性的にあいまいだという特徴があり、そのすべてが減んだということを見出した。（「劣等感からの解放」ジェームズ・C・ドブソン著 P.220）性の多様性の主張は性的にあいまいさであることから、これを取り入れようとしている日本は危機に直面していると私は感じている。

性は二つだけである。性の多様化は愛の混乱を生むだけあり、愛の混乱は不幸をさらに拡大するというのが結論である。男女の区別は、どちらかが優位とか権利があるとかいうものではなく対等の役割であり、相互補完的な立場にあるという認識を持つことが必要である。すなわち、愛において対等の立場であるという教育が必要と思う。絶対者である父母としての神を信じること、すべての解決はここから始まるのである。

以上

参考文献

[目次に戻る](#)

「神の愛で中で育む」 統一思想から見た子女教育 奈田壽美子 光言社
(成長過程の内容を参考にしました)

「人格教育」のすべて— 一家庭・学校・地域社会ですすめる心の教育 麗澤大学出版会
「人格教育のすすめ」アメリカ・教育改革の新しい潮流 コスモトゥーワン
(純潔教育の内容を参考にしました)

TRUE ARK 聖書とキリストを伝える総合サイト

「同性愛者への希望— 本当の原因と、実体験に基づく聖書的克服方法」

<http://true-ark.com/homosexuality-cause-solution/>

「男か女か」～同性愛のカウンセリングに～ICM 出版

「そうだったのか、LGBT」(社) LGBT 理解増進会

日本の LGBT 理解がどうなりつつあるのかの参考にしました。

「性同一性障害」Q&A クリスチャンとして考える ファミリー・フォーラム・ジャパン

性同一性障害のクリスチャンとしてのとらえ方は大いに参考になりました。

「劣等感からの解放」健全な自尊心を持つ子供を育てるために ファミリー・フォーラム・ジャパン

「性同一性障害って何?」— 一人一人の性のありようを大切にするために (プロブレム Q&A)

性同一性障害を何で持って判断しているかの参考にさせていただきました。

「性解放理論」を超えて 統一思想研究院 光言社

LGBT が広がった思想的背景、クィア理論を参考にしました。

『揺らぐ結婚』同性婚の衝撃と日本の未来 世界日報社

同性婚の内容等の記事を参考にさせていただきました。

「新版 統一思想要綱」統一思想研究院 光言社

「韓鶴子総裁御言葉集」2 鮮鶴歴史編纂苑

「文鮮明先生のみ言葉に学ぶ統一原理 (前編)」光言社

「真の愛で育む道」文鮮明 光言社

「宇宙の根本」文鮮明 光言社

「成約摂理解説講義案」 濟州国際研修院 教育事務局

「原理講論」世界平和統一家庭連合

「新 墮落性の構造」新墮落性の構造—こう解ける!人生問題 光言社新書 阿部 正寿

「聖書」新共同訳 日本聖書協会

なるべく引用は、新共同訳を使用しましたが、一部、本からの引用のものはその翻訳をそのまま載せました。

「ヘブライ語聖書対訳シリーズ 創世記 I」ミルトス

原語の意味の確認のために使用しました。

※トランスジェンダーについて

実際はトランスジェンダーは様々に分かれるが、LGBT という場合、ほとんど性同一性障害と同様の意味で扱われる場合が多いので本論文ではほぼ同じ意味で扱っており、男女の心が入れ替わっているというアイデンティティを持つものとしている。もともとは、医療概念としてのトランスセクシュアル (現在の日本において性転換症と称されるものに相当) の当事者が、自らのジェンダー・アイデンティティ (性同一性) のあり方が精神疾患であるとの差別的ラベリングを忌避するために、1980 年代末よりその当事者が自称として用い始めた用語であるが、現在はクロスジェンダーと呼ばれるような「両性」や「無性」や「中性」の性同一性を持つ者まで含んでいる。性同一性障害の場合は、ほとんど性の適合を願うのであるが、トランスジェンダーは必ずしも願わない幅広い意味を実際は持つ。しかし、報道されているものはほとんど性同一性障害の方であることから、性適合を望む性同一性障害者及び性適合を望まない性同一性障害者という意味でトランスジェンダーを扱っている。

統一原理から見た LGBT の問題点

創造本然の価値と価値基準から LGBT を判断することが、本来的な問題点をはっきりと知ることが出来ると考え、原理講論から下記の内容を引用した。

「ある個性体の創造本然の価値は、それ自体の内に絶対的なものとして内在するものでなく、その個性体が、神の創造理想を中心として、ある対象として存在する目的と、それに対する人間主体の創造本然の価値追求欲が相対的關係を結ぶことによって決定される。したがって、ある対象が創造本然の価値をもつためには、それが人間主体との授受作用により合性一体化して、神の第三対象になり、創造本然の四位基台をつくらなければならない。」(P.70 創造本然の価値決定とその価値基準)

「神の愛とは何であるかを調べてみることにしよう。神を中心としてその二性性相の実体対象として完成されたアダムとエバが一体となり、子女を生み殖やして、父母の愛（第一対象の愛）、夫婦の愛（第二対象の愛）、子女の愛（第三対象の愛）など、創造本然の三対象の愛を体恤することによってのみ、三対象目的を完成し、四位基台を完成した存在として、人間創造の目的を完成するようになる。このような四位基台の三対象の愛において、その主体的な愛が、まさしく神の愛なのである。」(P.73 愛と美)

男女の一夫一婦の愛こそが、四大心情、三大祝福をなす本来の在り方であり、LGB の行為は必ずしも本人が望んでなったわけではないとはいえ、この愛の秩序を壊してしまうことが問題なのである。

文鮮明先生の御言葉で見る LGBT の原因

「われわれは同性愛者を神の子供として愛しながらも、一方で、彼らがそのような道を行くようになった潜在的条件を理解するよう試みるべきである。おそらく女性の役割をする男性は、女性の霊に取りつかれている。おそらく子供のとき、彼は父親の愛に欠けていたので、男性を性的に愛することによって埋め合わせようとしているのである。」(理想家庭の指標_06 第三章 家庭における愛)

「相対を否定する文化世界がアメリカで膨張しています。天使に相対がいますか。男性は、昔、神様を裏切ったエバに従っていましたが、今からは、神様を支持するエバに従って行かなければなりません。」(宇宙の根本 p.353)

「アメリカは、終末に天使長の立場となり、天使長国家なので、女性が女性の資格を持つことができないのです。それで、ホモセクシュアルやレズビアンが出てきて「女性同士で結婚しよう、男性同士で結婚しよう！」と言うのです。天使長はパートナーシップ（相対関係）を認めません。所有権を認めません。女性を認めません。それゆえ、すべてそのようになっているのです。」(宇宙の根本 p.356)

統一原理と統一思想における神の存在証明

- (1) すべての存在は陽性と陰性、または主要素と従要素という相対的関係を持っている。他者との相対的関係を可能とするには先有条件があつてこそ可能である。その先有条件とは愛の概念であり、それは、愛を通じて喜びを得ようとした神の心情がはじめにあつたからに他ならないのである。
- (2) 人間は良心を通じて善をなそうとする心があるが、力は授受作用によって生じることから、その善の主体こそ神である。(創造原理 第二節 万有原力と授受作用および四位基台参考)
- (3) 聖書の神の創造過程は、科学の地球の生命の発生過程と一致しているのは神の啓示だからである。(創造原理 第五節 被造世界の創造過程とその成長期間参考 60 ページに対応表を作成)
- (4) 神の摂理は、ユダヤ教、キリスト教の歴史を通じて摂理的同時性として現れており、それは神が法則性を持って人間の復帰摂理を導いてこられたからである。アーノルド・J・トインビー (Arnold Joseph Toynbee、1889年4月14日 - 1975年10月22日) が、歴史は繰り返すといったが、その背後に神の摂理があることを説くことによって統一原理は歴史の中の神の摂理の足跡を見出している。この中に記された 12 数、4 数、21 数、40 数は、四位基台、正分合作用、成長期間、三対象目的などの創造原理の内容からどれも導かれ、統一原理ではその数を復帰摂理によって取り戻す摂理が行われたため、それが歴史に現れていると見る。(61 ページ表参考)

聖書の記述と科学で解明された過程対応表

創造日 (段階)	創世記 1 章の内容	科学での内容
第 1 日	初めに、神は天地を創造された。	真空相転移の揺らぎにより時空間が分れ、インフラトンによりインフレーションが始まり宇宙が生成。10 ⁻⁴⁴ 秒後、重力が生成。10 ⁻³⁶ 秒後、強い力が生成。10 ⁻³⁴ 秒後、インフレーションが終り、ビッグバンが起こる。1000 億分の 1 秒後、電磁気力から弱い力が枝分れる。1000 分の 1 秒後、宇宙の温度が 1 兆 K まで下がり、クォークが 3 つずつ結びついて陽子や中性子が形成、1 秒後、陽子と中性子が結合して水素の原子核が形成、30 万年後、宇宙の温度が 3000K まで下がり、宇宙が晴れ上がり、星や銀河が生まれ始める。
	天地（天宙）の始まり	物質宇宙が生成（約 137 億年前～）
	地は混沌であって	恒星（太陽）の周辺の円周ディスク（ガスと塵との雲）、円周ディスクが凝縮し惑星（地球）形成
	生命が存在不可能な荒地の地球	初期地球の形成（約 46 億年前～） 地球史年代 冥王代
	闇が深淵の面にあり、 海に覆われた地球と地表の間	水蒸気、メタン、アンモニアの厚い層？、現在の金星などから、不透明な厚い大気が推測される。 光の届かない地表の間？
	神の霊が水の面を動いていた。 原始の海での神の霊の動き （原始生物出現？）	水の惑星、最古の生命の痕跡 光合成を必要としない原始海洋生物の始まり。（約 38 億年前～） 地球史年代 始生代
	神は言われた。「光あれ。」 こうして、光があった。	核融合が太陽の中心部から少しずつ外側に広がったことにより、太陽の光度が増し、惑星間に残っていた塵や破片が重力によって減る。原始地球の火山活動が低下。
	光が地表に	光が地表に？
第 2 日	神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」 「上の水」と「下の水」の分離	火山活動の低下。太陽の光度が少し筒上昇。酸化的な大気の確立。対流圏の形成。高層の大気が安定化。彗星の流入による水分の補給。 安定した水の循環（蒸発した水が、雨や雪となって降って循環する）
	第 3 日	神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」 そのようになった。 さらに詩篇 33 章 7 節はこの画期的な出来事を詳しく述べています。「主は大海の水をせき止め、深淵の水を倉に納められた。」と大陸がかたまりとして、海に囲まれた一か所から成り立つと言う意味合いが読みとれる。
陸地の形成		陸地の出現（1 つの超大陸） （0%であった陸地が 29%に増加）
神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」 そのようになった。		空から光が差した。昼と夜の区別ついた。大気から有毒ガスの減少、穏やかな水循環の確立。陸地の形成
陸上植物の創造		最古の陸上植物の出現（4.95 億年前）
第 4 日	神は言われた。「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ。」 そのようになった。 天体観測が可能に	地球の自転周期の減速で平均風速の低下。海塩エアロゾルの量の減少で雲の層が薄くなり、さらに植物の光合成により大気から二酸化炭素と水蒸気が減少した。気温と気圧の安定化、火山活動の減少し、オゾン層の成立 半透明な（曇り空の）大気から、（晴れ間のある）透明な大気への変化
	第 5 日	神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。 魚類の繁栄と拡散 鳥類の創造
第 6 日		神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」 そのようになった。 現生の哺乳類の創造
	神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。	現代型ホモサピエンスの出現
	人の創造	

摂理的同時性の時代の対照表

